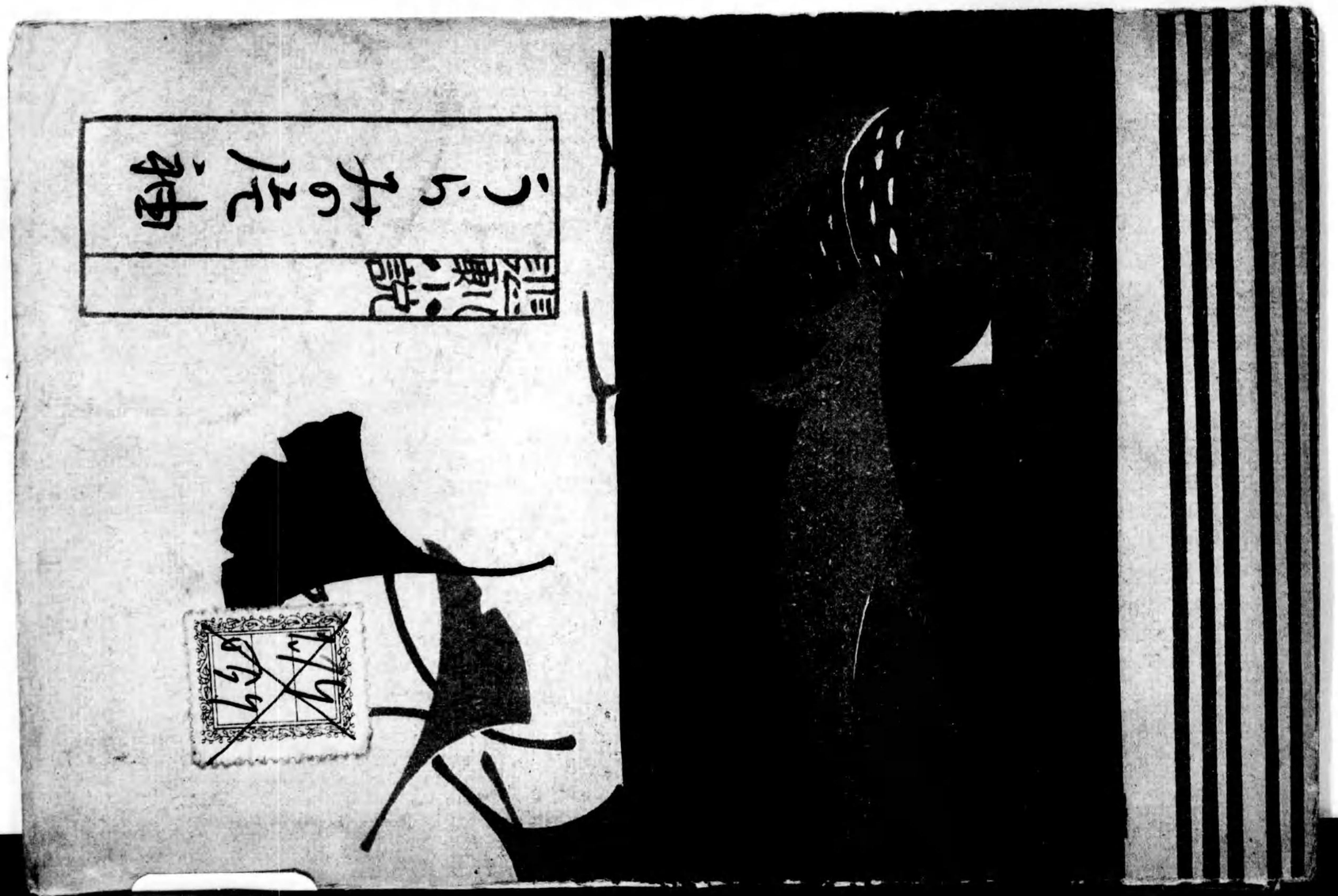
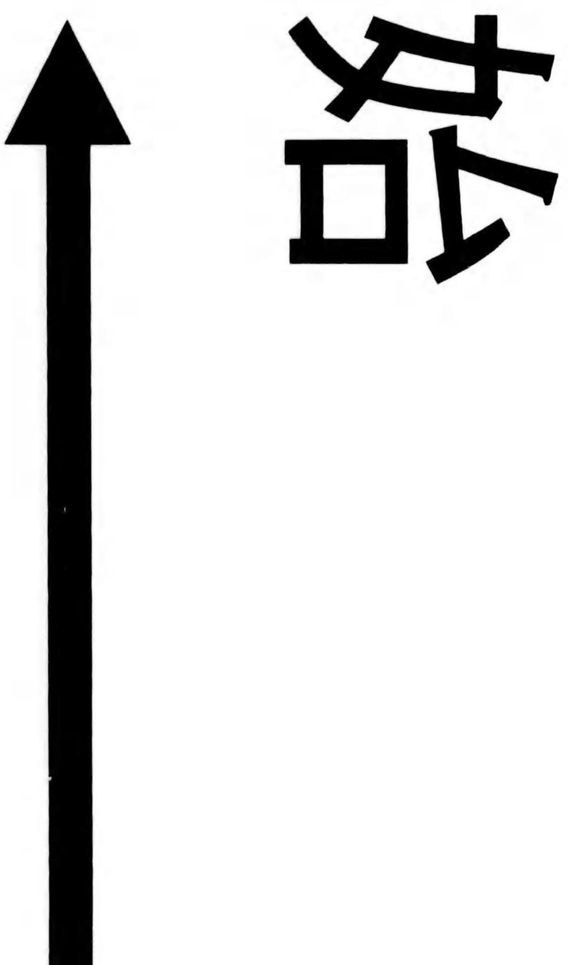
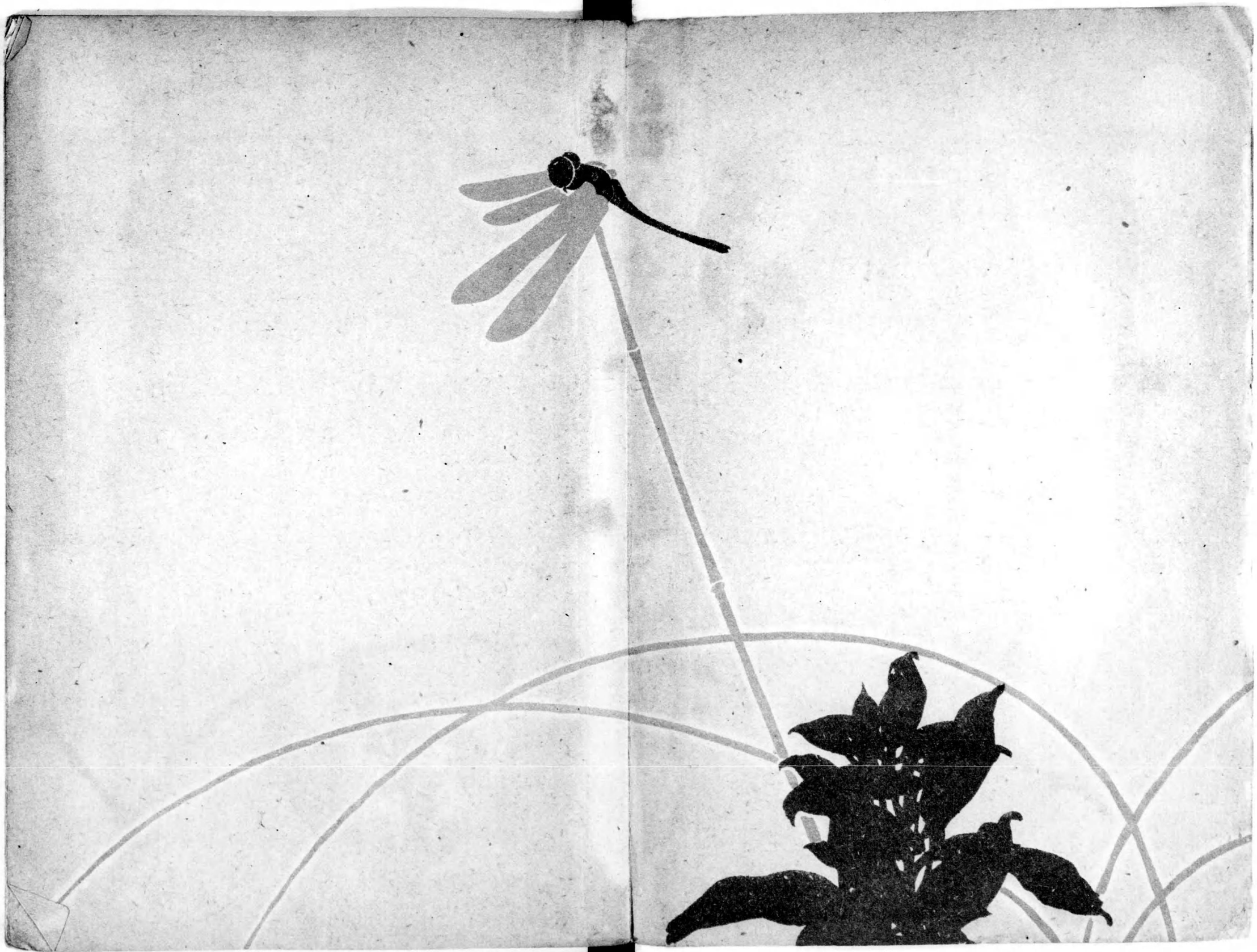

三條實美公書
じゅうたのさだ
御筆


給



特102
82

小説劇 神戸のみなと

大正
7. 11. 2
内交

袖片のみふう

恩愛小説　うらみの片袖

青木緑園著

一　花枝茶屋

美人の女房さんの名を其儘に、花枝茶屋と云つたら、此の界隈で知らない者はない料理店である。

もつとも、料理店といつた所で、駿河の御殿場から相州の山北へ出る街道の小さな町、場所が場所だけに大した家では無い、ほんの近在の若い者や、上り下りの旅人相手に宿屋をかねてゐる、片手間には竹細工もやる、百姓もやるといふのだから、

其の樣子も大ていは知れるであらう。

芝居の書割でいつたら、本舞臺一面の平舞臺といふ所である、遠くに鎭守神社の杉木立を見せて、家の前には松の立木が二三本、世話木戸、竹垣もあらうといふ古風な家だ、上手には、正面戸棚にビールやら正宗やらの壜、鑵詰などが飾つてあるのが、硝子戸越しに見える、ちよつとした小座數、仕切も何にもなくつて、すぐ土間に續いてゐる。

其の花枝茶屋の店頭に村の者が二人、主人の林珠太郎も一所になつて酒を飲んでゐる、酌をしてゐるのが二十ばかりの若い女、此の家の酌婦、ちよつと小意氣な扮裝である。

『醉つたせいか、踊るのに何も骨が折れて仕方がなかつた。』

と、渡邊房太郎が言へば青木八重太郎も、

『これぢや、今度の祭には餘りうまく踊れないかも知れない。』

『何の〳〵、醉つてゐてもその腰つきなり手振りなら大丈夫、若い娘たちがさぞかしやい〳〵騷ぐだらう。』

と、主人の珠太郎は大分調子がいゝ。

『はゝゝ、馬鹿に油をかけるぢやないか。』

『何本當だ、さあ息次ぎに一杯お飲んなさい。』

と、持つてゐた酒盃を房太郎にさした。

『眞實に面白かつたぎあ。』

と、酌婦は名古屋生れと見えて、訛りをさらけ出して言ひながら酌をする、酒盃は房太郎から八重太郎へ、それ〳〵一巡する。

『お里ちやんに褒られちや、おいらも本望だぎあ。』

と、八重太郎が眞似をする。

『あら、すかんたらん、置きあせなもの。』

と、お里は八重太郎の背中をどやす、房太郎が手を打つてはやした。

『よう〳〵、妬けます〳〵。』

『はゝゝゝ、それこそ置きあせなもだ。』

『それやそうと珠太郎どん、女房さんが見えないやうだが何かしなすつたのかね。』

『奥に居ますよ。』

『あゝ、左樣で、然し、珠太郎どんは幸福だよ。』

『何の幸福なことがあるもんかね、父親の代から可なりの身代を、おれが不心得とは言ひながら、元も粉もなく飲みつぶして、今ぢや此の通りの貧乏世帶、何の幸福なもんか。』

『それかといつて、おれ達のやうに年がら年中鋤鍬にぎつて、眞くろになつて稼いでゐる譯ぢやなし。』

『さうさ、ふところ手で樂をして暮してゐても濟むのだから、村中の者が羨やむ譯さアね。』

『それにさ、女房さんが黑人あがりで、あの通り金魚鶴亂といふ別嬪だから、それだけでも、羨ましいといふ譯さ。』

『オイ〳〵、金魚鶴亂とは何だい。』

『此の間講釋できいて來たが、金魚が見て鶴亂を起すほど綺麗な女だと云ふことだ、覺えてをきな。』

『人を馬鹿にしてらア、そりや沈魚落雁と云ふんだ。』

金魚でも沈魚でも大した相違はねえ、何しろ綺麗だよ。』

『おれっちの土臭い芋堀嬶たゝ比べものにやならねえ、これだけでも珠太郎どんは幸福だつて言ふことさ。』

と、口々に言つてる、珠太郎は擽ぐつたいやうな顏をして、默つて耳を傾けてゐたが、此の時、襖の内に衣ずれの音がして、誰やら人の來る樣子であつた。

二　綺麗な女

房太郎が目とく見つけて、

『やあ、君枝さんか、本當に何時見ても美くしいな。』

『ほゝゝゝ、おかめさんとでも言つて下さいな。』

と、言ひながら、そこへ出て來たのは噂をされた珠太郎が女房の花枝、二十五六の中年增、拔けるやうに色が白くつて、水の滴れるやうな黑髮を銀杏がへしに結つてゐる、目にすこし險があるのが、微瑕といへば缺點である。

『おや／＼お女房さんか、噂をすれば影つて言ふが本當だ。』

と、八重太郎も言ふ。

『みんなしてまた、私の惡口を言つてゐなすつたのでせう。』

『惡口どころか、お前さんは綺麗だつて言つて褒めちぎつてゐたところさ。』

『ほゝゝゝ、僞にも左樣いつて下さると嬉しいわね、こりや何か奢らなくつちや成りますまい。』

『その心組で先刻から珠太郎どんから、どつさり御馳走になつてゐるのさ、はゝはゝ。』

『ほゝゝゝ。』

『ほゝゝゝがあるかい、お世辭に綺麗だと言はれて喜んでゐやがる、世話アねえや七平三福め。』

『たとへお世辭だつて、褒められりや嬉しいものさ、ねえお里、そうぢや無いかね。』

『本當によ、私たつて皆さんが美くしいと云つてくれやあすが、まんざら惡い氣はしないによう。』

『何をいつてやあがるんだ、二人とも餘程お目でたく出來てゐやがる。』

と、珠太郎がボン〳〵言つてる所へ、人の足音、雨の足、傘をさしかけて來た三十前後の商人體の男がある。

『御免なさい。』

と、入つて來る。

『あ、こりや京屋さん、よく御入來なさいました。』

と、珠太郎は恐縮さうに頭をかきながら、そこにあつた座布團を敷きなほす、こちらの房太郎、八重太郎は、お里の酌でちびり〳〵やりながら見て居る。

『餘りよくも來ませんのさ。』

と、一座の樣子をぢろ〳〵見廻しながら、どつかと腰をかけて、

『時にお拂ひを戴きたいんですがね、何とか今日は都合して貰いたいものですがね。』

『左樣いはれると實に申譯がありませんが、そこを何かもう少しお待ちなすつて下さる譯にや行きますまいか。』

『そりや行きませんゝ小僧や番頭をいくら催促によこしても、酢の蒟蒻のといつて百も入れて下さらないから、今日は私がぢき〳〵伺ひました、ことに此の月はお祭がありますから、どうしても頂戴して行かなければ、家の者へも仕置が付きませんの。』

『でも御座いませうが。』

『あゝ、待つて下さい、今日は辯解を訊きに來たのでは御座りません、御金を頂きに參りましたので、ええと、〆て八十九圓と六十錢、耳を揃へて受取りたいものでごわす。』

と、京屋の主人中島笑太郎は威猛高になつた。

『もし京屋さん。』

と、花枝がにじり出して、にやりと笑ふと、今まで嵩にかゝつて威張つてゐた京

屋の主人は、急にグニャ〳〵になつて、

『あ、花枝さん、いつも御美くしうごわすな。』

『御世辭のいゝことばつかり仰有います。』

『何の何の、まつたく以て花枝さんの美くしいのは此の界隈の通り相場でさあ。』

『御冗談は置いて、あの御勘定のことで御座いますがね。』

『はい〳〵。』

『御言葉は決して無理とは思ひませんが、如何で御座いませう、そこの所をその、ちよつと待つて頂く譯には行かないものでせうかね。』

『左樣さね。』

『此のお祭さへ濟めば、きつと何とか始末をつけますから、みんな御拂ひ出來ないと迄も半分なり、三分の一なり、きつと御屆けしますから、今日のところは御待ち下さる譯には行きますまいか。』

『ぢや何だね、祭が濟んだら若干か入れてくれるかね。』

『えゝ、そりやもう仰有るまでも御座いません、何にせい、私共の商賣は祭とかいふ人出が書入れどき、祭さへすめばまた幾らか餘計なお金も入らうといふものですから。』

『それぢや、祭が濟んだら半分でもいゝから入れて下さいよ、さう話が分れば何、私だつて無理に今日貰つて行かうといふんぢやない。』

そこで話が濟んで京屋の主人中島笑太郎は歸て行く。

三　悪い相談

やがて房太郎も八重太郎も歸ると、お里は立ち上つて座敷の掃除を初める、珠太郎は火鉢の前に座つて、花枝と顔を見合せて溜息をついた

『すつかり洪水のあとのやうだね。』

『ウン、さうよなア。』

『あゝして京屋からは催促して來るし、お祭が來ようといふのに、酌婦を抱へることの出來ないのはどにかくとして、可愛い子供に着せる晴着の工夫もつかないし、お米ももう御仕舞ひといふ始末だが、お前さん何しやうね。』

『如何しやうつて別に心配するにや及ばないぢやねえか、買つてくりやいゝ。』

『買つて來る位、お前さんに言はれなくも知つてゐるけども、その買つて來るお金は何するんだ。』

『金か。』

『さうさ、お金の入る目的でもあるのかい。』

『心配するなつてことさ、痩せても枯れても林だ、ちやんと心算がしてあらア。』

『どんな心組？』

『百兩どりの無盡が二口かけてある。』

『あら、私はちつとも知らなかつたが、そりや本當かね、ぢやその無盡を落したらいゝわ。』

『落ちればいゝがなア。』

『そりやお前さん、少しは損をしてもいゝから、是非落すのさ、この場合だから百圓が八十圓でもいゝぢやないか。』

『さうかなア。』

『どうしたのさ。』

『ところが其の無盡がさ……二口でも、去年の夏落して仕舞つて殺なんだが、落ちるかどうか考へてるんだ。』

『厭だよお前さん、私しや眞面目に話をしてるんだよ。』

『だから落ちればいゝと思つたんだ。』

『冗談ぢやないよ、人を馬鹿にしてさ、落し話ぢやあるまいし。』

『そんなに怒るな、無盡が不可きあ、他に七十五兩入る見込みがあるんだが、花枝、どうだらうな。』

『私が知るもんかね、姦通の相場ぢやあるまいし、七十五兩とはいやに細かく刻んたぢやないか。』

『實はその姦通さ。』

『えッ？』

『と云ふのは、實は京屋の大將から思ひ付いたのさ、おれが辯解したのぢや些とも聞き入れないのが、お前が一言いへば、もうグニャ〳〵になつて歸つたところを見ると、彼奴はお前に御座つてゐる。』

『冗談はよしにしてをくれ。』

『どうだ、一つやつて見ねえか。』

『金になることだから、話の樣子によつちややらないものでも無いけれども、他に何とかいゝ工夫は無いものかね。』

『彼方も此方も借金だらけで、二進も三進も行かなくなつてるおれだ、他に目的があつたら、何もこんな人の惡いこたあ演たかあねえ。』

『姦通見つけたそこ動くなと來ると、狂言と分つて居ても、餘りいゝ心持はしないやあね、子供や酌婦の手前も氣恥かしいぢや無いか。』

『ヘン、恥かしいといふ面ア、もう三寸ばかし長いぞ。』

『何だつて。』

『なにさ、此方のことだわな。』

『可愛いゝ亭主のいふことなら、どんな狂言でもやつて見なきあならないんだらうけども、子までであるのに、餘り馬鹿々々しいわね。』

『それがといつて、何も本當にいゝ仲になつて終ふんぢやねえ、何とかいゝ加減に

あしらつてゐる廊へ、おれが物かげから飛び出さうといふ寸法さ。」

「そりや分つてるがね、他に何かいゝ方法はないものか、といつて今更二度の引眉毛もいやだし。」

と、花枝はその美くしい顔に眉根を寄せて考へるのであつた。

「母ちやん、お金おくんな。」

と、不意に聲をかけて、ぱた〳〵と飛んで來た五つか六つの男の子、母親の花枝に似て美くしい。

「あゝ。」

と、珠太郎も花枝も、ハッとしたやうに顔を見合せた。

四　可愛い女房

風が誘へば落葉が走る。

日は暮れて、まだ月は出なかつたが、東の空は仄に白く、森のあたりはボーッと霞んだやうに見える。

「困つたな、どうも、此の酒はもう賣物にはならないぜ。」

と、言つたのは主人の珠太郎である。

「馬鹿々々しいぢやないか、苦しい思をして七所借をして積み込んだのが、ものゝ三圓と賣らないうちに惡くなるたあ、これも家がいよ〳〵不可くなる前兆かも知れない。」

「仕方がないね、涼風が立つてから酒が惡くなるといふのは何しても分らない、弱り目に祟り目とは此事たわね。」

と、女房の花枝も嘆じた。

「祭を當て込んで仕入れた酒が、こんなことになつて仕舞つちや……おれはもう

何したらいゝのか分らない、夜逃げでもしなくつちやなるまい。」

『家が恁う不可くなつたのも、元はといへばお前さんが悪いからさ。』

「何、何だつて。」

『まあさ、怒らないで御聞きよ、こんな商賣といふものはね、有合せの肴の外にお世辭と愛嬌が肝腎、それなのにお前さんは、わたしが少し愛想でもいつて冗談口でも聞けば、いやにチン〳〵を起してさ、ほんとに馬鹿々々しい、田吾作や掠十に、誰がすき好んでお世辭をいふものかね、ちつたあ考へて見るがいゝわね。』

『ウーン、だが、女房が御客樣とぢやら〳〵してゐるのを見てゐるなあ、餘りいゝ氣持ぢやねえ。』

『そりや私だつて、何にも好んでするんぢやなし、何の因果でこんな土百姓の御機嫌を取り結ぶのかと口ぢや笑つても腹ぢや泣いてるわね、お前さんはそんなことは知らないから、あたしに當りお客に當り、そしてとう〳〵こんな寂れるやうにもな

つたのさ。』

『今更そんなことを言つたつて仕方がねえやな。』

『仕方がないといへば夫迄だが、こんなところで鎭守樣の高麗狗のやうに白眼くらをしてゐた所で何にもなりやしないのだから、どうかまあお前さんも一生懸命に稼いでおくれな。』

『ウン、稼ぎたいにも、折角の酒がこれぢやなア。』

『本當にしつかりおしよ、お前さんがそんな氣の弱いことをいつてゐちや仕方がないぢやないかね。』

『といつて、何にも恁うにも仕方がねえんだからなア。』

『仕方がねえッて、お前さん、晝間の話はありや何したのさ。』

『何を。』

『あれ、もう忘れて終つたのかね、お前さんこそ仕方がないぢや無いかね、京屋の

大將の話さ。』

『醉つた調子で、下らないことも考へて見たが、おれにやそんな人の惡いことは出來やしない、第一、いくら困つたからつて、可愛女房に、なれ合とはいひながら言ひがゝりをするなんて、考へて見てもいやだ。』

『あたしに言ひがゝりをするんぢやないやね、京屋にするんぢや無いの。』

『同じことだ、子供の手前も恥かしいやな。』

『何も、私が進んでしやうといふんぢやなし、お前さんがその氣なら、わたしは結句都合がいゝといふものだが。』

虫が啼く、こほろぎが肩させ、寒さが來るぞと、二人を嘲けるやうに啼く。

珠太郎も花枝も、默つてぢつと耳を傾けてきいてゐた。

『厭になつちまふわね、本當につくづく厭になる……』

と、何を思ひ出したか、花枝は投げるやうな調子で云つた。

『な、なにッ、何か厭になつた？』

『厭になつたよ、貧乏が。』

『おれだつて貧乏はすきぢやねえが、運が惡いんだから仕方がない、だがお前、餘り貧乏が酷すぎるのでおれに厭氣がさしたのぢやねえか。』

『馬鹿らしい、冗談はおよしよ、今更厭になる位なら、お前さんのところへ來やしないやね。』

と、花枝は烟脂の染み出した長煙管で、煙草の箱を引き寄せて、雁首で箱の中をかき廻しながら、

『それに、好男といふ可愛い兒まである仲ぢやないか、何かしてもとの財產をとりかへしたいと思へばこそ、身もふりも構はないで稼いでゐるのが、お前さんにや分らないのかね。』

五孝行娘

月が出た。

花枝は煙草を一いき吸て、夫の方へさし出した、珠太郎は、鼻に小皺を寄せて笑ひながら受けとる。

『そりや分つてるが……』

『分つてゐたなら何にも言ふことはありやしないやね、今日はいやに寂しい晩ぢやないかね、もう仕舞ふぢやないか、お前さんはそこらを片づけておくれな、私も掃除をしやう。』

『お前がさう言つて呉れゝばおれも嬉しい、そのつもりで一生懸命稼ぐとしやうかな。』

『明日は明日の風が吹くわね、くよ〳〵思つてゐたからつて何なるものかね、お前さん一本つけやうかね。』

『左様さな、景氣よく一杯やつて、ゆつくり夢でも見やうかな。』

『さうおしよ、酒は憂の玉箒つて云ふから、飲んで何もかも忘れてるうちに、また面白い考が出まいものでもない。』

花枝は立ち上つて店先へ行つた。

黒雲の亂れ、ひら〳〵と西へ走る、走つては月をかくして、月をかくしては走つて行つた、何所からともなく鐘の音が、しつとりと濕つて響いた。

『御免、一本つけて貰へやうか。』

と、唐突に聲をかけて入つて來た五十七八の老爺があつた、草鞋、脚半に身をかためて、旅裝束、疲れたらしい樣子で、ずつと中を見たのである。

『もう仕舞つて終ひましたが。』

と、花枝は言ひながら老爺を見た。

『御仕舞なすつたところを御氣の毒だが、酒がなくつちや、旅が出來ない、冷でもいゝから一杯おくれ。』

『はい、それぢや、肴も何にもありません、本當にお冷でよろしければ。』

『もう〳〵構ひません、それで結構、酒のみは肴をきらつてはゐられない、はゝゝは。』

と、笑つたが、その底の音は寂しげに聞えた、ほつとしたやうに腰をのしながら内へ入つて、店先に腰をかけた。

花枝は樽の呑口を輕くひねつて、コップに滿々と酒をついで、一升桝を其儘にさし出した、老爺は手早く取つて、一いきに飲み乾すのであつた。

『たつた一杯といつたが、もう一杯お代りは貰へますまいか。』

『ほゝゝゝ、如何ほどでも、私どもは商賣ですから、たんと召上つて戴く程有り難いのですけれども、老爺さん、お前さん大丈夫ですか。』

『あゝ、うまい〳〵、いゝ酒だ、オツとこぼれます。』

『たんと召しあがれ。』

『げえッぷ、酒といふものは有りがたいものだ、實は今日は何だか胸がむしやくしやして仕方がなかつたが、一杯ひつかけたら、もう胸がすつきりしやした、これだから酒はやめられ無い、はゝゝゝ、もう一杯。』

『ほゝゝゝ、老爺さん大分いけますのね。』

と、花枝はこぼれるやうに笑ひながら、その三杯目を戴いでやつた。

『や、有りがたい。』

と、言ひながら、息をもつかずに呑みほすのである。

『大分御機嫌うゝございますね。』

『わしや何より酒がすきでね、三度の飯は四度にしても廢められやせん、はゝゝ

は。』

『とんだ落話ですわね。』

『落話し、落話し。本當に話にあるやうな詰らない身の上さ、はゝゝゝ、もう一杯貰ひませうか。』

『御遠慮なく、たんと。』

『はゝゝゝ、や、有り難う。』

今度のは、一口のんで其儘下にをいた。

『老爺さん、丈夫でようございますわね、その位の御年で、大したものですわね。』

『餘りよくも無いのさ、はゝゝゝ。』

『そんなことはありません、人間長壽する程幸福なことはありません。』

『長壽をすれば幸福といふのは、それは金持のいふことで、わしのやうな貧乏人なんざあ早く死ぬに限るよ、わしは此の年になつて、嬶には死なれるし、可愛い子供は手離しちまうしね、つく〳〵世の中が厭になるよ。』

『まあ、さうですか。』

『世間の人が孝行娘だつて褒めてくれますがね、孝行な娘をもつて、わしはかへつて悲しいと思ひます。』

と言つて、老爺は涙をぬぐひながら、天井を見あげてほつと溜息をついた。

六 風呂敷包

『孝行娘を持つたが悲しいとは、そりや可笑いぢやありませんか。』

『話をしなけりや分りませんが……藝が身を助ける程の不幸とでもいひませうか、わしにとつては孝行娘を持つ程の薄倖、悲しいことで御座いますわな。』

『と申しますと、何所ぞへ身賣でもなさいましたか。』

『お察しの通り、お袋が長らくの病み煩ひ、わ〻は思ふやうに稼げず、借金に利がつもつて百圓といふ大枚な金、それを何でも返さにやならない破目になつて、たつた十三になつたばかりの娘が、身を賣つて助けてくれました。』

と、いひながら、老爺はさめ〴〵とすゝり泣くのであつた。

『身を賣るといへば、私も覺のないことではありません、お察しいたします。』

と、花枝も心から痛ましげに言つた。

『昨日東京まで送つて行つて、今朝新橋の停車場で別れて來ましたが、別れたとき、の泣顏がまだ目の前に彷彿てゐます、今頃はどうしてゐるか、死んだお袋の夢でも見てゐるでせう。』

『お可哀想にねえ。』

『故郷をはなれて、見ず知らずの他人の仲で、どんなにか辛い目を見るのか……』

『でもまあ、よく思ひ切つて別れて來なさいましたね。』

『……』

老爺は言葉もなくそこへ突伏して泣いてゐたが、やがて氣を變へて、

『こうなるのもみんな運なら仕方がありませんが……詰らないことを言つて、酒が覺めて來た、どうかもう一杯下さい、娘に身賣をさせて酒を飲むたち、冥利が惡いとは思ふけれど、酒でも飲まなきや押立つてゐられねえ。』

『御無理はありません。』

と、言ひながら花枝は酒を濺いだ、それを一口に呑みほすと首にかけた胴卷から金をつかみ出して勘定を拂つたときに、懷中から小さな風呂敷包が落ちたのを、老爺はちつとも氣がつかない樣子であつた。

『あゝ酔つた、いゝ心持になつた、大きにお世話になりやした、左樣なら。』

と、よろ〳〵と立ち上つて、足もと危なげに外へ出た。

『本當に何所の人だか知らないが、可哀想なことをした、お前さんそこを締めて下さいな。』

『ウン、似たやうな身の上だ、おれたちだつて娘でもありや、藝者にでも賣らなきやならない破目だ。』

『さうね。』

言ひ交して立ち上つた、珠太郎は外の戸を締める、花枝はあたりを片づけてゐたが、ふと其所に汚ない風呂敷包が落ちてゐるのに氣がついた。

『おや。』

と、花枝は拾ひあげた。

『何だ。』

と、珠太郎は表戸をしめて終つて座敷へ上つた。

『何だか知らないが、今のお客樣が落したのかも知れない。』

と、手にとつて見たが、ふつと顏色を變へて四方を見廻した。

『ど、ど、何うした?』

『お前さん。』

と、花枝は聲を潛めた。

『えッ。』

『今の人が落して行つたのだよ、娘を賣つたとか云ふお金が、そつくり其儘入つてゐるのだよ。』

『遠くは行くまい、追ひかけて渡してやらう、ないと知つたらどんなにかまあ落膽するだらう、可哀惡に……』

と、言ひかけたが、花枝の顏色、目の光の異樣な輝きに、射すくめられるやうな氣持がして、氣味惡そうに立ち縮んだのである。

『追ひかけて行つて、渡してやるのはいゝけれども、何所の人だか、何方へ行つた

のだか分りやしないんだから。」

「それも左様だが、可哀想に……」

「そりや可哀想にはちがひないが……」

と言ひかけて、二人とも呼吸を押し殺すやうに默つて終つた。

「何やら人の足音がする、忙しなげに此方へ飛んで來るのだ、二人は青ざめた顏を見合せた、そして花枝は、その風呂敷包を火鉢の曳出へ終ひ込んだ。

珠太郎は默つてそれを見てゐたが、とめやうとはしなかつた。

七身代金

忙しい足音が近づいて來た、二人の胸は急に動悸がし出したが、さりげ無く奥へはいつて終つた。

戸を叩く、破れんばかりに雨戸を叩く、二人は默つて返事もしなかつた。

「おかみさん、女房さん。」

「……」

「ちよつと開けて下され、今酒を飲んで行つた老爺です、忘れものをしましたので歸つて來ました。」

「誰方ですか知りませんが、急用でなければ明日にして下さいな。」

と、花枝は中から答へた。

「急用です、急用です、ちよつと起きて下さい、わ、わ、忘れものです。」

と言ひながら、尙ドン〳〵叩く。

「靜かにして下さいよ、雨戸が破れますから……何にもありません、またにして下さいな、もう火を落したのですから。」

と、言ひながら花枝は起きて。

『あけてお呉んなさい、ちよつと忘れものをしたのでごわす。』
『何か御用。』
と、がらつと戸をあけて、
『折角ですが、もう火を落してしまつたし、肴も何にもありませんから、また此の次にして下さいな。』
『酒はもう入らない。』
『では、何か御用？。』
『わしだ、先刻酒を飲んで行つた老爺だ、遲くなつて濟みません。』
『もう一杯ですか、ほゝゝゝ。』
『いや、酒どこちやない、大事なものを忘れて行つた。』
『何か御忘れもの？。』
『か、かね、生命の金を忘れた、命を忘れて行つた。』

『冗談いつちや不可ませんよ、命といふものは人間の身間についてゐるものですよ、それを忘れて行くなんて、惡い酒落ですよ。』
『酒落どこちやない、生命より大事の金を失した、お、お、女房さん、此に風呂敷包が落ちてはゐなかつたかね。』
『風呂敷？　知りませんね、お前さん知つてるかね。』
と、花枝は夫に聲をかけた。
『風呂……しき……どんな風呂敷だね。』
『金をいれた風呂敷包、今もお前さん方にお話した孝行娘が身代金の二百圓、それが落ちちやゐなかつたかね。』
『金い入つた風呂敷ぐらあ、おらア知つて……ゐる筈がないぢや無いか。』
老爺に立ちすくんだ儘、きつと二人の顏をにらんでゐた、涙は慘として痩せた頰に流れ落ちた。

『おかみさん、旦那、此の老爺をたすけて下さい、もしや、ひよつと風呂敷包が落ちてゐたら、わしに返して下さい、わしを助けると思つて……』

珠太郎は默然として訊いてゐた、花枝はあたりを見廻して、

本當に風呂敷包なんか御座いませんでしたよ、有さへすれば、何の默つてゐられませう、先刻もあとで、あたし達にも人ごととは思へない、本當にお可哀想なことだと涙をこぼして話をした所なんですよ。』

『……』

『本當にね、お氣の毒とも言ひやうはありません、それでも念のため、もう一度さがして見ませう。』

と、花枝は立ち上つて灯を持つて來て、臺所の隅から、床下まで隈なく探したが、見えやう筈はなかつた。

『こんなに探しても無いのだから、お前さん餘り醉つて、どこか其所らで落したのぢや有りませんか。』

『どうも可笑しい。』

『おかしいとは何がおかしいんです、もしか此所へ落したのを、あたしが盗つたとでも言ひなさるのですか。』

『そ、そういふ譯ぢや無いが、どうも他へ落した覺がないから。』

『覺がある位なら落しはしませんよ。』

『フム。』

『それともあたしが盗つたと御言なのかね、何時盗りました、さあ何時盗つたか、證明を立てゝ下さい、今ぢや恁うして微錄してるけれども、つい五六年前までは指折の物持……あんまり見縊つたことは言つて貰ひますまいよ。』

『何もお前さんが盗つたといふのぢやないが、どう考へても不思議だ……』

と、老爺は聲をあげて泣いた。

八水けぶり

『老爺さん、お前そんなに泣いたつて仕方がない、泣くなあ無理はないが、泣いたつて失した金が出る譯ぢやなし、おれも一所に行くから路を探して見やうぢや無いか。』

と、珠太郎は進みよつて老爺を助け起した、老爺はしやりあげくて力なく泣きながら見上げて、

『來た路を探したが、何にもありやしない、もう探したつて無駄だ。』

『そう言つたものでもない、山里ではあり人の往來も澤山はねえんだから、またいい按配に落ちてゐないとも限らない、さあ、出かけやう。』

『孝行娘の身の代が失なる、金がなけりや生きちやゐられない、何といふ因果なこつたやら、夜ふけにお邪魔をいたしました、はい左樣なら。』

と言ひながら外へ出た。

月が、あはく仄かに、悄然として歩む老爺の影を、灰色の街路に落して、かさかさと鳴る風のつめたさ、道ばたの草むらに泣き立てる虫の聲も悲しかつた。

* * * * * * *

この宿の外れを、清く澄んだ小川の流しが切々として東に走つてゐる、谷深く、水急に、石に激し、岩に碎けて、飛沫雪を噛んで捨てるが如く、月光に躍りながら、やゝ東へ下ると、そこは紺碧の色を湛えて、倒影描くが如く深淵をなしてゐるのだ。

水樹に白露、草葉に虫聲、團々として、韻々として、秋の夜が更けて行くころ、一人の老爺が孤影悄然として岩頭に立つてゐた。

月が雲に呑まれた。

あたりは俄かに暗くなつた、虫の聲と、川瀬の音と、相和し、相潤んで、寂しさはこと更増して來た、老爺はきつと、川底を臨んで果敢げな溜息をついた。

『てつきりあの茶店に忘れて來たとは思ふが、證據がなければ何にも恁うにも仕方がない。』

と、言ひさして、天を仰いで悵然として肩をすぼめた。

酒が惡い、酒が終には身を果す、借錢が出來たのも、娘が奉公に出たのも、その身代を失したのも、もとはと言へばみんな酒が惡いのだ、とは言ふものゝ、わしが惡いからのこと、あゝ情ないことだ。』

と、悲しげに獨語した。

月が雲の間にまた光を見せた。

『酒は惡いといつても、この年老で、酒より他に樂しみはないから、年がら年中酒

を飲んで憂を忘れてゐたが、その酒のために憂世の憂を、一度に忘れてしまふ時が來たのだ、娘が聞いたら、どんなにか歎くだらうが、あゝ、もう出來てしまつたことは仕方が無い。』

と、恨めしげに仰ぐ空、黑い雲がむら〳〵と走つて來て、また月をかくした、虫の音、川瀬の音、又しても高く闇の夜の空に響く。

『折角の娘の志を無にして……これも運がないのだ、勘辨してくれ、な、娘』

と、すゝり泣きして、さながらそばに人のゐるやうに言つた。

また月が出た、と、虫の音がピタリとまつて、何やら人でも來るやうな樣子がしたが、老爺は氣が付なかつた、卒然、身を躍らして、川をめがけて飛び込まうとした時に、後から、

『危ないッ。』

と、怒鳴つた男がある。

その時、老爺の身體はもう岩頭を離れてゐた。

「あッ。」

と、駈けよつて、袖をおさへたけれども、もう遲かつた、その片袖を手にのこして、老爺の身體は、底も分らぬやうな深い淵へ水音高く沈んで行つた。

「しまつた。」

と、どうと大地に突伏して、しばらくは物も言へなかつた、その男は、流石に追つてあとを追ひかけて來た、茶店の主人の珠太郎であつた。

やがて立ち上つたその顏に、生きたる色は見えなかつた、しばらく川の底を見てゐたけれども、飛び込んで其儘生命は絶えて終つたか、聲もしなかつた、姿も見えなかつた、たゞ川瀨の音ばかりがいつに變らず響いてゐた。

水けぶりのあとさへ見えず、悠々として川は流れてゐた、珠太郎は、間もなくとぼとぼと家路へ歸つた、月が、その悄然たる姿を薄く地上に描いてゐた。

九　片袖の秘密

轉ぶやうにして、珠太郎は家へ歸つて來た、花枝はもう寢てゐた。

「花枝、花枝。」

「何ですね騷々しい、靜かに言つたつて分るぢやありませんか。」

「咽喉が渴いて仕方がない、水、水を一ぱいくれ。」

「何したんだねお前さん、顏の色つたら眞蒼で、そしてその扮裝はどうしたのですね、まあ……」

と、言ひながら起きて來た。

「どうも恁うもない大變だ、水をくれ、水を……」

「下手な村芝居の手負ぢやあるまいし、水々つて、水のない所から來たやうぢやあ

りませんか。」

「咽喉が渇いて仕方がない。」

と言つたが、四方を見廻して、

「あッ、いゝ、酒を飲む、酒でいゝ。」

と、樽の栓をひねつて、一升桝に半分程溢いだのを、呼吸もつかずに飲みほして仕舞つた。

花枝は呆れたやうに見た。

「お前さん、まあ、何したのですね。」

「大變だよ。」

と、胸を撫でて、

「あの老爺さんが投身して死んぢやつたんだよ。」

「えッ？」

と、さすがに花枝もギョッとした。

「とう〳〵死んだかね、可哀想なことをしたねえ、そんなことだつたら温順しく出してやるんだつたけれども……」

「今更そんなことを言つたつて、仕方がないやな。」

「まつたく、今更仕方がないが……お前さん、その死ぬのを見てゐたのかね。」

「おかしいと思つたから、飛びついて待てつて言つたが、遅かつた、片袖をふんづかまへたが、袖はちぎれて、爺さんは川へ……」

「あッ。」

と、花枝は恐ろしさうに手をふつて、

「もう止とくれ、もういゝよ、澤山だよ、きいてさへも私しや身の毛が慄立やうだが、お前さん、誰も見てゐるものはなかつたらうかね。」

「そりやもう、人ッ子一人通らない、あの長淵だから……」

と、思ひ出しては歯の根も合はなかつた、又しても、酒を濺いでぐつと呑みほし、

『どうだ、お前もやらねえか。』

『本當に、一杯のんで氣を落ちつけやうかね。』

と、花枝も飲んだ。

『自分が殺したといふ譯ぢやないが、餘り氣持のいゝものぢやない、何といつても仕方がない、寢るとしやうかな。』

『それがいゝわ……然し、死んでくれて幸福さ、あの金のことは、あたしとお前さんより他に知つてるものは無いのだから、公然に使へるといふものだわね。』

『さうよなア、何所の人だか、娘が何所に勤め奉公をしてゐるのだか、せめてそれだけでも分つてゐたら……いや分らない方がかへつて氣が樂かも知れない。』

と、又しても恐ろしさうに身ぶるひして、

『あゝ、あの老爺さんが、とぼ〳〵と出て行つた姿が目に見えるやうだ。

『何だね氣の弱い、こうなつちや仕方がないから、氣をしつかりお持らよ、どんなに考へたつて、あの人が生きかへる譯のものぢやなし、ビク〳〵しないで、氣をしつかり、男らしくおしなさいよ。』

『そりや左樣だ。』

と言つたが、手にもつてゐた老爺さんの片袖を見ると、又してもその時のことを思ひ出すと、生きてる空はなかつた。

氣を勵ましてはゐるものゝ、花枝もありやうは何となく薄氣味が惡かつた、二人は默つて恐ろしそうに寄り添うた儘、まんじりともしないで一夜を明した。

* * * * * * * * *

あくる朝になつて、片袖のない老人の死體が發見された、そして忽ちにして村中の評判になつたが、老人は何所のものとも分らなかつた。片袖のないのが、何かの

秘密を語つてゐるやうに取り沙汰されたが、然し、誰でもその秘密を知つてるものはなかつた。

それから間もなく、林夫婦は花枝茶屋をすつかり賣り拂つて、店を仕舞つて東京へ出た。

一〇 星明り

『お父さん〳〵』

と、悲痛な聲をあげながら、濱町河岸を新大橋の方へ飛んで行く十二三の小娘があつた、夜ももう曉に近い二時頃、冷たい風が川から吹きあげて來る、人通りはちつとも無い、電柱のうす紅い灯がぼんやり街路を照らして居る。

皮膚にも顏色の〳〵つきりと白い、丸ぽちやの可愛らしい娘が、髪を振り亂して、

呼吸せぎながら、わきめもふらずに飛んで行くのだ、むかふに交番の灯が見えたが、娘はそんなことには氣の付かない風でひた走りに走つて行つた。

『お父さん〳〵、妾も行きます。』

と叫びながら、裾を風にあほらせながら、艶めく脛に紅いものを捲きつかせて、泣きぶ……低いけれども悲しい聲をふり絞つてゐる。

何か目に見えぬものに引かれて、耳に聞えぬ聲に呼ばれて、さうして走つて行くかのやうに思はれるのだ。

『待つて下さい、あたいも行く……』

交番の前を通りこして、新大橋の橋詰へ來た時に、件の小娘はひらりと身を躍らして、波の光る大川の面を目がけて飛び込まうとすると、背後から、

『……』

むづと袖を捉へた者があつた、一生懸命に振りはなさうと身をもがいたが、そこ

は小娘、力及ばず引き戻された。

「どうしたのです。」

と、太く力のある聲、星あかりに娘の顏を覗いたのは、色の白い美青年、眉の間に太い皺を寄せてぢつと見た。

「は、はい。」

と、娘はさめ〴〵と泣いた。

「どうしたのです、事情を御話しなさい。」

重ねて言はれて、娘は初めて氣がついたやうにハッとして青年の顏を見上げた、拔割れ髮を振り亂したのが、美くしく頬をふくんだ顏にかゝつてゐる。

「事情を御話しなさい、事情を……見ればそんな小さいお前さんが死ぬなんて、一體どうしたのです。」

と、三度び斯う言つた青年は、三十を一つも越したかと思はれる年頃、何所とな

く氣品の高い、威嚴のある顏立である、娘は恐ろしそうに見上げて、

「はい。」

と、呻くやうな聲で言つた。

「どうしたんだね。」

「いえ、あの。」

と、あたりを戲呂々々見廻して、風の寒さが身にしみると、我にかへつたやうな眼光で、初めてはつきりと青年を見上げた。

「見れば寢衣の儘で、この夜更に、寒くつて仕方がないだらう。」

と言ひながら、青年は手早く自分の着てゐたマントを脫いで、

「さ、これを着なさい。」

「いえ、あの。」

と、もぢ〴〵してゐる。

『いゝから御着なさい、そんな長襦袢一つで、第一道が歩けやしないぢや無いか、温順しく言ふことを聞きなさい。』

と、青年は叱るやうに言つて、強ひて外套を着せた、娘はその柔しい情の嬉しくてか、ほろ〳〵と涙をこぼした、それをぢつと見入つて、

『さ、此所で立ち話もしてゐられないから、歩きながら話を聞かう。』

『はい。』

と、立ち上つた。

『おい〳〵。』

と、青年は背後を顧みて呼んだ。

『倉々。』

『へイ。』

遠くの方で返事がした、新大橋の手前から、俥を挽いてがら〳〵と飛んで來たの

は、お供の車夫と見える、近寄ると、不審さうに娘をすかして見て、

『若様、大丈夫でごぜいやすか。』

『何をいふのだ、お化が出やしまいし、お前のやうな臆病ぢや迚も供にや連れて歩け無いね。』

『ですが、その、川端でふら〳〵長襦袢の凄い姿を見せられると、ぞつとして終ひまさあね。』

『はゝゝゝ、意氣地の無い奴だ、此の娘さんを乗せて邸へ連れて行け。』

『へイ、でございやすかな。』

と、恐ろしげな風で娘の方を覗く。

『何だ、意氣地のない、幽霊ぢやないやね。』

と、若様の笑つたのが、星明りによく分る程、その歯が白かつた。

二　華族の若様

若様は娘を顧みて、

『とにかく、俥にお乘んなさい。』

『はい、いえ。』

『心配するには及ばないよ、僕は番町の柳原といふものだ、今晩友人が外國へ行くので、その送別會があつてね、その歸途なんだが、餘り醉つて苦しかつたので、此の河岸をぶら〳〵して風に吹かれてゐると、お前さんが投身でもする樣子なので、それで留めたのだが、これも何かの因緣だと思ふ。』

『はい。』

『何にしてもいろ〳〵話をきいて力にもならうぢや無いか、とにかく僕の邸まで一

所にお出で。』

『はい、ですけれども。』

と、もぢ〳〵して居るのを、車夫が、怪しいものではないと云ふことが分ると、急に元氣づいて威勢よく、

『もし〳〵娘さん、心配するなよ、こう、斯う見えたつて此の若樣は、番町の柳原といふ華族の若樣で、意氣で、高等で人柄で、底に情のお在なさる方だ、心配するにや及ばねえ、お前さんの惡いやうにやしねえから、さ、安心して俥に乘んな。』

『何を言ふのだ彦』

『へイ、ちよつとその……』

と、車夫の福田彦太郎は苦笑した。

『さ、構はないからお乘り。』

と、柳原子爵家の令嗣、柳原綱館はやさしく娘を促した。

華族の若様ときいて、娘は勿體なさに身肉もぶる〳〵ふるへるやうだつた、その方に助けられたのさへ分外なのに、外套を着せて貰つて、そしておまけに俥に乘るなんて、そのやうな失禮なことが出來るものかと心の内に恐れ戰いた。

『飛んだ失禮……存じませんものですから……』

と、きれ〳〵に言つて地上へ手をつかんばかりに頭をさげた。

『いけ無い〳〵、そんな所へ座りこんで終つちや仕方がない。』

『勿體ない。』

『何を言つてるのだ、さ、早くお乘んなさい、家へ歸つてからゆつくり事情を聞かう、その事情に依つては、隨分お前さんの力になつても遣うぢや無いか。』

この位の小娘、しかも此の夜更に、長襦袢一つでうろ〳〵してゐるのは、何か仔細が無くてはならぬ、髪の結ひ様、顔容の美くしさから考へると、柳橋か芳町邊の半玉が、抱主の恐ろしい鞭の下を逃れて、憂世の苦痛を死んで免かれやうとしたのでは無いかと、私に想ひやつて、さてこそ家へ連れて行つて事情を聞いて、力にならうといふのである。

『さ、おい、早く。』

と、促した時に、ばら〳〵と駈けて來る人の足音、若様はきつと見て、物も言はずに車夫に目配すると、心得て娘の手をとつて引き寄せやうとした。

『あの、ちよつと御待ち下さい。』

と、いふ女の聲がした。

若様も、車夫も、娘も、愕然として顧みると、忙しげな呼吸づかひをしながら、二十八九の年増の女が、その白く美くしい顔を三人の前へ見せた。

『まあよかつた。』

と、胸を撫で下して、ほつとしたやうな吐息をついて、

『本當に癪ちやんは心配させるぢやないか、でもまあ、無事でよかつた。』

「あゝ、母さん。」

と、娘は取り縋つた。

その様子が、いかにもなつかし相なのが、若樣にも、車夫にも不思議だつた、窘められたとか、折檻されたとか、さういふ苦しさを免かれやうとして家を飛び出したのならば、逃げもこそすれ、なつかしげに寄り添うとは思ひも寄らなかつたので、ちよつと不審だつたのである。

「誰方か存じませんが、有り難うございました。」

と、年増の美人は、ずつと近寄つて柳原の前へ丁寧に頭を下げた。

「いや、何有。」

と、柳原はさりげ無い挨拶だつた。

「この娘はもしや、投身でもしやうとしたのでは在りませんか。」

「母さん。」

と、甘へるやうに袖にすがつて、

「あたし、何だか宛で夢中で此所まで飛んで來て仕舞つたの。」

「まあ、それで！」

「何う云ふ事情か分らないが、丁度來合せた僕が見ると、何だか投身でもするやうに見えたのでね。」

と、柳原は言葉をはさんだ。

三　其の面影

「はい。」

と、女はぢつと柳原を打ち仰いだ。

美くしい女である、周章て家を出て娘のあとを追ふたのか、平常衣の上へ黒縮緬

の羽織を被たのが、その無造作に捲いた黒髪としつくり合つて、何所か大家の奥様とも見える人柄、それでゐて艶かしい所もある、襟足が抜けるやうに白い。

闇に、その白く美くしい顔をあげて、ぢつと柳原を見上げた、ぢつと見てゐると、その清しい眸の底にさつと一道の光が、なつかしげに動いた、その面影に何所やら似通つた所があるので、若様は本當の母子だらうと思つた。

『いろ〳〵御親切に有り難うございました、おかげ様で、娘一人、命びろひをいたしまして、こんなに嬉しいことは有りません。』

と、女は丁寧に頭を下げて、

『私は芳町に月の家といふ藝者屋をしてゐる、卑しい女でございますが、此所で立つて御話いたしますのもいかゝと存じますから、何うぞ手前どもまで入來つて下さいませんか。』

『月の家？』

『はい、月の家の女將で淺妻と申します、これは、私の養女分で榮枝……榮ちやん、お前さんも、よく御禮を仰有い。』

と、榮枝を顧みた。

『あ、左樣ですか、とにかく母親が御出でになつたのは幸、それでは娘さんは御渡し申しますから……』

と、柳原は身を驕へして、

『彦。』

『へイ、御歸りで御座いますか。』

『ウン、歸る。』

と、俥へ近づく。

『あの、失禮で御座いますが、ちよつと御寄り下さる譯には行きますまいか。』

『もう遲いから失禮しやう、とにかく娘さんを慰つておあげなさい。』

と、俥に乗ると、車夫は梶棒をあげてさつと走り出した。

「あれ、御待ち下さい。」

と、あとを追つたがもう及ばなかつた、俥は大橋の通りへ消えて行つた、提灯の灯が、あかくゆすれながら、うすく淡く、だん〳〵遠ざかつて行く、淺妻も粲枝も物足りなさうにそれを見送つてゐた。

しばらくすると、

「本當にどうしたのさ。」

「濟みません、あたしも何だか宛で夢中で飛び出したもんだから。」

と、本當に夢のやうな心持ちで言つた。

「どんなに心配したか知れやしなかつたよ、目をさましてひよいと見ると、お前さんの姿が見えないんだもの、氣がつくと表の格子があいてるのだらう、本當に屹驚してね。」

「……」

「でもまあ良かつたよ、あの方が來合せて下すつたので……どうしてまあお前さん投身なぞしやうつて氣になつたの。」

と、歩きながら、

粲枝は一所に並んで、

「濟みません。」

「そんな、濟みませんの、申譯がないのつて、そんな事は如何でもいゝがね、いつくらお父さんが死んだからつて、それをくよ〳〵案じて自分も死なうなんて考へを出しちや不可いよ、お前さんが死んでしまつたら、それこそお父さんだつて、誰が供養してくれるのか分りやしない、おまけに、知らぬ土地であんなことで死なつたのだもの、たつた一人の娘のお前さんにひよんなことでも在つたら、まつたく浮ばれないぢや無いか。」

『はい。』

と、言ひながら、もう榮枝はすゝり泣をして居る。

『今の世の中だから、敵をとるつて譯にも行くまいけれどもね、片袖が切れてゐるのだから、きつと人手にかゝつたに相違ない……敵を探し出して恨を晴したり、忌日命日の供養をしてあげるのが、お前さんの勤めぢや無いかね。』

『あたしが惡かつたのです、あたしが……』

と、榮枝は悲しげに叫んだ。

『惡いことは無い、たつた一人のお父さんが非業に死んだのだから、悲しいのは無理はない、生きてる瀨がないのは無理はない、あたしも本當に察しるよ、けれども、そのためにお前さんが死にでもしたら……』

と、淺妻もすゝり泣の涙を禁じあえなかつた。

『まあ〳〵、悲しいことは考へないで、これからはもう、あたしを本當の母さんと思つてね、いゝかい。』

一三　娘の悲哀

榮枝は、悲しさと嬉しさに聲をあげてわつと泣いた。

『泣くんぢや無いよ、泣くんぢや無い……』

と言ひながら、淺妻もいつしよに泣いてゐるのだ。

『あたしにも、生きてゐればお前さんと同じ位の娘があるのさ、だから餘計お前さんが可愛くつてね、その娘の身代りだと思つてこれから、あたしはお前さんの本當の母さんだよ、だから、もうくよ〳〵思はないでね。』

『えゝ。』

『心配しないがいゝよ、本當の母さんだと思つて、思ふ存分わが儘を言つてをくれ

よ、ね。」

と、淺妻は榮枝を堅く抱きしめて泣いた。

『そしてお前さん、何して家を飛び出したの。』

『お父さんの夢を見て……お父さんが此方へ來い、此方へ來いつて言ふもんですから、それでつい夢中になつて……』

『まあね。』

『そして、あの方に引きとめられるまで、宛で夢中で、ふわ〳〵しながら死んだお父さんのあとを追つかけてゐたの。』

『さうかね、左樣いふこともあるかも知れないわね、でも、よかつたよ、あの方が來合せたのでね、あの方は一體……どうも何所か聞き覺えのある聲だつたけれども……』

『華族の若樣ですつて。』

『お前さん知つてるの。』

『あの、車夫さんが言つてましたわ、番町の柳原さんつて仰有る方ですつて。』

『柳原さん。』

と、聞きかへした淺妻の聲は異樣に昂奮してゐた。

『えゝ、番町の柳原さんと仰有る華族の若樣なんですつて……本當に御情深さうないゝ方ですね。』

と、何にも知らぬ榮枝は言つた。

『いゝ方……いい方、本當に若樣はいゝ方だつたわね。』

と、呟やいたが、何故かその眼は涙に光つてゐた、しばらくは物も言はず、立ちつくした儘、星の明るい空を打ち仰いで、淺妻は太いため息を吐いた。

『もう御別れしてから十三年……お姿も變つてゐなすつたし、夜ではあつたし、似たやうな方とは思つたけれども……それとも知らないで……』

と、獨語してそつと涙をぬぐつて、

『何を言つたつて、もう仕方が無い、御緣が無いのだから。』

『母さん。』

と、榮枝が聲をかけた。

『榮ちやん、お前さんも寂しいね。』

と、淺妻は榮枝を抱きしめて、はら〳〵と涙を流した。

『母さん、泣いてらつしやるの？』

『何を母さんが泣くものかね。』

『だつて、涙が……』

『ほゝゝゝ、こりやね、榮ちやんが餘り可哀想で仕方がなかつたからなの。』

と、力を籠めて、

『お前さんも一人、あたしも一人、お互ひに不幸に生れたんだね。』

『あたし、お父さんは死んでも、此方の母さんがゐるから……嬉しいの……』

『本當に、あたしもお前さんといふ娘がひよつくり生れたんだつけね、一人ぢや無かつたんだ、可愛い榮ちやんといふ娘と二人だつたんだね。』

『母さん。』

『あいよ、榮ちやん。』

と、星のまたゝきの寂しい空の下で、風の冷たい川の畔で、更けて行く夜を、淺妻と榮枝は相擁して泣いた。

話で察しられる、非業の死といひ、片袖のない死體といひ、榮枝こそは疑ひもなく六郷川へ身を沈めた老人の娘であつた、新聞の記事を讀んで、榮枝が父親の變死を知つたのは、つい五六日前のことであつた、抱主の淺妻と一所に故郷の小山へわざわざ出向いて死體を引きとつて、淺妻の情で厚く葬つたのは昨日のことであつた。

老人の持つてゐた二百圓がなくなつてゐたのと、片袖のないのが疑問の中心にな

つて、しばらく人の噂さに高かつたが、然し、それは有耶無耶になつて終つた……

老人は何者であらう、何して娘を賣るやうになたつのか。娘とはいひ條あまりに年が幼少に過ぎる……柳原子爵……淺妻……そこにも何か緣がつながつてるやうだ。

一四 虫の聲

水のやうに月日が流れた。

東京へ出た林珠太郎は、不思議と運がよくつて、トン〳〵拍子に金が貯つて行つた、惣領の好男の他に一人も子のなかつたのが、物足りなくはあつたけれども、然し夫婦の生活は幸福であつたやうに思はれたのである。

けれども然し、夜、人靜まつて後、思ひ思ひの夫婦の夢の底に、暗い影がかくれて居て、折ふしごとに、二人の幸福な生活を脅やかすのであつたが、金が儲かつて、相場が當つて、人からも成金などと言はれるやうな境遇にゐると、それも忘れて過すほど面白いことが多かつた。

その内に、女房の花枝が病み出した。

初めは、周圍の人も本人も、風邪を引いた位のことゝ思つてゐたので、大して氣にも留めなかつたが、花の散る春の終から床について、夏を越して、秋になつてもまだ癒ならなかつた。

日增しに惡くなるばかり、涼風が立ち初めると、めつきり惡くなつたのが人の目にもついた、珠太郎の氣の落しやうは、それは〳〵他の見る目も痛ましい程であつた。

日ごとに痩せ衰へて行く花枝の、蒼白い、肉の憔ばた顏を見守つてゐると、仕ぜとにもはづみが無かつた。

米屋町の店は、すつかり番頭や小僧に任せて、帳面をのぞいたこともなし、深川の本宅も、花枝が病みついてから荒れ放題であつた。

店へ行つてゐても、家へ歸つてゐても、不愉快で仕方がなかつた、女房の枕元に坐つてゐると、氣が滅入つて仕舞つて、頭が重くつて仕方がなかつた、その癪店へ出てゐれば家にゐる女房のことが氣になつて、落ちついて算盤を持つてゐられなかつた。

見るものも、聞くものも、不快な、暗い感じを與へた、店にも家にも、陰氣な空氣が澱んでゐるやうで仕方がなかつた、そんな時に、誰でも決つて意味深いものに眺めるのは、あの賑やかな花柳界の夜であつた、さうでなくても商賣柄、ちよい〳〵出入をしてゐたのが、此の頃はとりわけはげしくなつた、如何かすると、晝間から手近の芳町や柳橋あたりで淺酌低唱、しつぽりと奥座敷で美くしく飾つた妓とむかひ合つてゐたり、さうかと思ふと大廣間で可愛盛りの半玉を十五六人もあげて、陽

氣に唄ひはやしてゐることもあつた。

それでも、家に病んでゐる女房のことを思ひ出すと、急に酒もまずくなつて、唄も三味線も面白くなくなつて、あたふたと家へ歸つて來た。

そんな時に、花枝は、口から火を吐くやうな形相をして、夜着のしたから恐ろしげに珠太郎を見据えた。

『どうだ、苦しいかい？』

と、藥の茶椀を花枝の口許にあてがつてやると、その手をしつかり握つて、

『お前さんも……』

あとの言葉は、唇をわな〳〵戰はせてゐるばかりで、聲には出なかつた、鈍い、光の落ちた眸からは留度もなく涙が流れて來るのであつた。

昔の美しい面影もない、苦しいだらうと思ふと、珠太郎も耐らなくなつて鼻柱をこするのである。

『苦しいか、え、苦しいか。』

『お前さん、もう昔のことは忘れてしまつたんだね。』

と言つた花枝の目が異様に光つた。

珠太郎は襟もとから冷水を浴せられたやうな氣持になつた、肌がぞく〳〵寒氣だつて來た。

『忘れるもんか。』

『忘れなかつたら、些たあたしのことも考へて……少しは家にゐて下さいな。』

『ウン、ゐるとも、ゐるとも。』

何がなしに恁う言つて、珠太郎は恐ろしげに顏をそむけた、その顏を追ふやうにして、花枝は聲をかけた。

『そして……あの……お願ひがあるんですがね。』

『何だ。』

『あたしは恁なに煩らつてゐるし、あなたは御店の御用があつて、始終家にもゐられないんですから、何かにつけて不自由ですから、妹のお八重を呼び寄せたいんですけれども、何でせう。』

『あゝ、いゝとも、お前の好きにするがいゝさ。』

と、言つて立ち上つた時に、臺所の方で虫の啼く聲がした、何といふ虫か分らなかつたが、その虫よりも果敢ない命だ、少しは落ちついて看病してやらうと、珠太郎はしみじみ考へた。

一五　黒い　眸

間もなく、花枝には本當の妹のお八重を呼び寄せることになつた。

今年二十といふ娘盛りで、美くしさが一日ごとに目立つといふ程、姉の花枝が、

小山の片田舎にゐた頃は、着のみ着儘でくすぼつてゐたのが、段々金が自由になるやうになると、兩親も一所に東京へ呼んで少からぬ金も貢いでやつたので、それ以來めつきり女ぶりをあげた。

姉によく似て美くしかつた上に、何所となく愛嬌があつて、帝劇の女優のやうに不思議な程人を惹きつける黑く清しい眸を持つてる、艶めかしい女であつた。

その眸が、珠太郎の心を捉へて仕舞つたのである。

食べることでも、着ることでも、雇人の世話では、お互ひに苦勞をしあつた女房、半分程も心に染なかつた、その寂しさと不自由をこらへて、珠太郎は秋の幾日を送り迎へしてゐた。

ある夜のことであつた。

店の用事が意外に長びいて、家へかへつたときはもう全たく日が暮れてゐた、それでも義理ある妹が來てゐるので、その手前、不實な仕打も出來ないから、厭々な

がらも、此の頃はよく陰氣な家へ歸つて來るのであつた。

車を降りて家の戸をあけると、お八重がいそ〳〵と出迎へてくれた、女房が病みついてからといふもの、家へ歸つても出迎へてくれるものはなかつたが、此の頃はお八重が出迎へる、それが何より嬉しかつた。

『お歸り遊ばせ。』

『花枝は？』

と、珠太郎はすぐ聞いた。

『今よく御休みなすつてゐます。』

『さうか、毎日々々、八重ちやんの世話になることだ。』

『いゝえ、何しまして、行き届きません。』

『そんな事はない、八重ちやんが來てから大分いゝやうだ。』

こんなことを言ひながら珠太郎は内へ入つた、お八重はいそ〳〵と立ち働いて、

膳拵へをして茶の室へ持つて來た。

「今晩は何だか馬鹿に寒うございますわね。」

「ウン。」

と、珠太郎は寂しげに膳の上を見たが、すぐに物足りなさうな顔をして、目を外した儘、すぐに箸を取らうとはしなかつたのである。

「何か爲さいましたか。」

「いや、どうもしやしないが……何だか物寂しいよ。」

「そりやね、姉さんがあゝして寢てゐて、ちつとも兄樣の御用が足りないんですから御無理はありませんわ。」

「そんなことぢや無いんだが……はゝゝゝ。」

と、寂しげに笑つた。

彼は此の頃酒を禁つてゐる。

「どうでせう、一本燗けませうか。」

「さうさ、一本位いゝだらう、燗けて貰はふかね。」

「ほんとに、ちつと位お飲りしなつた方がようございますわ、兄さんは御苦勞が多いんですもの。」

と、お八重はこぼれるやうな愛嬌を、その黑い眸に現はして言つた、お八重が來てから、口にしない酒を、お八重に勸められて飲む氣になつた。

重ねるとも無く珠太郎は酒盃を重ねた、下地はすきなり御意はよし、一本が一本では濟まなかつた、二本三本となると、いゝ心持に醉つて終つた、そして、女房が病氣で寢てゐることも、何もかも忘れて終つて、どこか料理店の小座敷で、藝者を相手に飲んでゐるやうな浮さ〳〵した心持になつた。

「八重ちやん、一杯あげやうか。」

「えゝ。」

と、お八重は否みもしないで首肯いた、そして莞爾と笑つた艶かさに、珠太郎は心も氣もそゞろになつて、呑みほした酒盃をさした。

お八重はそれをぐつと飲みほして、再び妖艶に笑つて盃をかへした、ほんのりと醉がその美くしい頰に現はれて、黒い眸が艶めかしく珠太郎を打ち仰いだ。

『八重ちやん、お前今晩は馬鹿に綺麗に見えるよ。』

『あら、あんなことばつかり。』

と、お八重は羞かしげな態度を見せて、紅い襦袢の袖で顏をかくした、珠太郎の心には、もう花枝のことなどちつとも考へてはゐなかつた。

一六　落葉の影

『母さん、早く全快ておくれやう。』

と、好男は言つた。

學校から歸ると、すぐに母の居間へ飛んで來て、そして心配さうに顏をのぞきながら言ふ位、それ程好男は心のやさしい子であつた。

『あゝ、全快るよ、全快るよ、全快らないでゐるものか。』

と、花枝はほろ〳〵と泣いた。

藥を飲ませたり、水をやつたり、好男は子供のやうでもなく、よく母の看病をしてゐた、花枝は力めて不味い藥を飲んで、心から早く全快たいと願つてゐた。

『母さん、お藥あげやうか。』

と、藥壜を持ちあげる。

『いゝの、今、飲んだばかりだから、も少し經つたら貰ひましよ。』

『さうかい。』

『お前も家にばかりゐると何だから、少しは外へ出て遊びなさい。』

『僕、遊ばなくつてもいゝの。』

『そんな事を言ふもんぢやありません、母さんのことは、叔母さんが世話をしてくれるから、お前は心配しないで、遊んでらつしやい、家にばかりゐると、身體が弱くなつて、母さんのやうな病人になるから。』

と、花枝は強いてすゝめた。

『僕、病人になんかなるもんか、遊びに出なくつても、學校で運動するから、體は大丈夫だよ。』

『さう、運動するの。』

『あゝ、體操だの、テニスだの、駈くらだのつて、いろ〳〵あるの。』

『さう〳〵、何時か運動會があつて、見に行つたつけね。』

『今年だつてあるんだよ、だけども、今年は母さんが來られなくつて詰らないなア。』

『早く全快つて行きたいけれども……』

『だつて、もうこの次の土曜なんだもの、とても起きられはしないやね、僕、詰らなくつて仕方がないや。』

『好ちやん。』

と、ばかり、いぢらしい我子の心情に、病んで氣の弱くなつてゐる花枝は、すぐに泣かされるのであつた。

『母さん、泣くの。』

『何の、母さんが泣くもんかね。』

『だつて、涙が……御腹が痛いの。』

『いゝえ。』

『ぢや頭が痛いの？』

『……』

『叩いてあげやう。』

と、好男は枕許へ進んだ。

『いゝの、いゝの、何所も痛くはないんだから、お前、心配しないでおくれ。』

と言ひながら、花枝は夜着の襟に顔をかくして、さめ〴〵と泣いた、夕日があかく座敷の障子にさして、庭の木立に風がさら〳〵と鳴ると、ばら〳〵と葉が黒く片片たる影を描きながら、やがて地に落ちた。

好男は默つて母の肩を撫でてゐた、勝手の方でお八重の明るい花やかな聲がした、花枝は顔をあげて、

『ありがと、もういゝから二階へ上つて勉強してをくれ、あとにも先にもたつた一人、お前はこの林の家の一粒種なんだから、勉強して、立派なものにならなくつちや不可ません。』

あれ程氣の强かつた花枝であつたが、病氣以來、めつきり弱つてしまつて、何ぞ

といふと涙をこぼした、言葉にも聲にも、しみじみした調子があつた。

『えゝ、僕、きつと立派なものになります。』

と、好男は威勢よく言つた。

『ほゝゝゝ。』

と、花枝は頼もしげに微笑して、

『きつとね、エライ者に成つてをくれ、母さんはそればつかりを樂しみにしてゐるんだから、ね、お前。』

『えゝ、きつと、きつと、僕、きつとエライ者になるんです、僕ね、學校でもいつも甲ばかり貰ふんだよ、甲つて、母さん知つてるかい、一番よく出來ることなんだよ。』

『さうかね、母さんは學問しないから何にも知らないけれども……何にしても一生懸命に勉强してをくれよ。』

『あゝ、勉強するさ、だけど、まだ二年位ぢや、勉強しなくつても出來るんだよ。』

『ほゝゝゝ。』

と、花枝は嬉しげに笑つた。

『母さん、僕、御清書を持つて來て見せやう。』

と、言ひながら、好男は立ち上つて出て行つた、それを見送つて、花枝はほろほろと涙をこぼした。

『本當に何といふ優しい兒だらう。』

と、思はず知らず呟やいて、につと笑ふのであつた。

一七　告げ口

はら〳〵と木の葉が散つた、その音が耳に泌む程、家の中はひつそり閑と靜まり

返つてゐた、ふと目を覺した花枝は、枕許に誰もゐなかつたので、細い聲で、

『八重ちやん。』

と呼んだ。

然し、返事はなかつた、やがて明るい花やかな笑ひ聲が、勝手元の方から響いて來たが、然し、返事をする聲は聞えなかつた、花枝は重ねて呼んだ。

『誰かゐないかね。』

それでも返事はなかつた、立ち上らうとしたが、その力はなかつた、落膽して、その儘俯伏しになつて寢てゐた。

『母さん、どうしたの。』

と、言ひながら好男が入つて來た、花枝は蘇生したやうに喜んだ。

『あの、藥をお呉れな。』

『どれ？』

『それ、その小さな青い壜……あゝ、それだよ、そこに猪口があるから、それにあけてね、濟まないけれども呑ましてお呉れ。』

『えゝ。』

と、好男はやさしく言つて、指圖されたやうに、藥をいれた猪口を、母の口もとへあてがつてやつた、がつくり飲んで、うれしさうに舌打して、

『有りがと。』

『有りがとうなんて、そんな……』

と、好男は、親子の間柄で、改まつて御禮なぞ水臭いといふ心を、顏色に現はして母の顏を見た。

『八重ちやんはゐないのかい。』

『ゐるよ、臺所で何か用をしてゐたやうだつた。』

『さうかね。』

と、厭な顏をして、

『わたしの看病に呼んだのだけれども、此の頃は初めのやうに世話をしてくれないが、飽きたのかしら。』

と、獨言した。

また花やかな笑ひ聲がした、花枝は眉を潛めて、

『何が面白いんだらう、人は病氣で動けないと云ふのに……』

『叔母さんはね、お髮結つてるの。』

お髮結ふたつて、先刻から彼是もう三時間ばかり顏を見せないんぢやないか、何もそんなに念入りに御化粧しないたつて、物見遊山に出かけるんぢやあるまいし。』

と、花枝はつぶやいたが、

『でも、毎日々々、陰氣な病人の看病をしてゐて、氣がクサ〳〵するだらうから、たまには芝居へでも……それに柳山人の初舞臺が大評判で、割れッかへるやうな

人氣ださうだから、出かけたいだらう……あれも氣の毒な。』

と、花枝は思つても見た。

『母さん。』

『え？』

『叔母さんね、此の頃毎晩お父さんと一所にお酒を飲むんだよ。』

『えッ、八重ちやんが……』

『あゝ、叔母さんだつて飲むんだよ、そしてね、此の間なんぞ、お父さんが、叔母さんに、八重ちやんは馬鹿に綺麗だなんて、さう言つてたよ。』

と、好男は言つた。

利巧なやうでも、そこは子供、ふと思ひ出した儘に、そんなことを言つたら、母の病氣が惡くならうとは思はないから、露骨に言つて終つた。

『本當……本當かい？』

と、言つた花枝の聲は忙き込んでゐた、目が恐ろしげに釣りあがつて、顏の色は蒼白く變つてゐた。

『本當にお前、叔母さんがお父さんとお酒を飲んでゐたのかい。』

『えゝ。』

『お前、見たの。』

『あゝ、僞なんか言ふもんか、女のお酒のむのは外見ないやね。』

『そして、お父さんが、叔母さんに何か言ひはしなかつたかい。』

『母さんより、叔母さんの方が餘程いゝ女だつて。』

『まあ、ぢや本當なんだね、良夫も良夫だが、お八重もお八重だ……口惜しいッ。』

と、齒を嚙んで、思はず起き直らうとした形相の凄まじさに、好男は我を忘れて、花枝の袖を捉へて、

「母さん〳〵、如何したの？」

と、涙聲を振りしぼつた。

一八　涙の笑顔

兎に角にも、珠太郎は女房には親切であつた、何ぞといふと、花枝の方が氣が勝つてゐて、我を通すことが多かつたが、それでも珠太郎は高い聲一つ出さなかつたのだが、此の頃は、宛で別人のやうに變つてしまつた。

お八重も變つた。

何にも知らぬ房州生れの、肥滿の下女も、變に感じる位であつた、絶え入るやうな苦しい呼吸のしたから、妹の名を呼んでも、澁〳〵しながら姉の枕許へ行つた、そして、何時も佛頂面をして笑顔一つ見せなかつた。

それを、花枝が氣がつかない筈はなかつたのである、ある時、そのことを思ひつめた花枝が、怨みがましい涙聲で、とぎれ〳〵にかき口説いたことがあつた。

「お八重、お前、よく兄さんの世話をしてくれるさうだね……あたしは本當に……御禮を言ひますよ。」

「何ですね、そんな。」

「ほんとうに親切で、あたしは心から有りがたいと思つてます。」

「……」

「本當にお前は親切ものだよ、何となく妙に親切だつてね……あゝ、いつそのこと、お前なんぞ來て貰はなければよかつたわ。」

「……」

さすがにお八重は口がへしは出來なかつた、その儘そこを飛び出して、折ふし店から歸つてゐた珠太郎の居室へ駈けこんで、わつと泣き聲をあげた。

『どうした、どうした。』

と、珠太郎は目を丸くした。

『姉さんが……姉さんが……厭なことを言ふんですもの。』

『何、花枝が何を言つたつて。』

『あたしに、出て行けつて、左様いふんですもの、あたし、自分から望んで來たんぢやない、姉さんが困るから來て家の面倒見てくれつていつたから、それで……』

『何をいふのだ、唐突に。』

『歸ります、歸ります、あんな厭味をいはれたり、邪魔にされたりして、誰が、誰がゐるもんですか。』

『まあいゝよ、そんなに心配するなよ、萬事はおれが承知してるんだから、病人の花枝が何をいつたつて、氣にかける奴があるもんか。』

『だつて〳〵。』

『あれは病氣で氣が變になつてるんだ、一人前の人間ぢやないんだ、そんな奴のいふことを氣にかけて堪るものか。』

『……』

顏をあげたお八重の眸は、涙に濡れて一層美くしく、かつ艶かしく見えた、珠太郎は可愛くて堪らぬといふ風で、やさしくその背を撫でた。

『さ、涙なんぞ拭いて……先刻から腹が空つてゐるのだ、早く夕飯の仕度をしてくれないか。』

『えゝ。』

と、莞爾。

食卓が運ばれた。

酒を吸みかはして、甘い囁語が、口から耳へ、耳から口へ、樂しげに取りかはされてゐたとき、奥で、花枝の咳いる聲が痛々しげに聞えた。

珠太郎は我にもあらず顔色をかへて立ち上らうとすると、お八重がその袖をとらへて怨めしげに見上げた。

「やつぱし、姉さんのことが氣にかゝるんですわね。」

と、思ひ切つて言つた。

珠太郎は其の儘腰を据えた。

一九　血の涙

何もかも家内中のことはお八重が切つて廻すやうになつた、此の頃ではもう姉の病氣を看病に來たといふよりは、姉が死んだので、その後妻に來たといつてもいゝ位、それ程お八重は姉の花枝をあるがなしに扱つてゐた。

恨みつらみが澤山あつた、病身の、身動も自由でない女房を投つてをいて、現在

その妹のお八重といちやついてゐるのだから、花枝の口惜しさ悲しさは言ふばかりもなかつたが、然し何といつても手足が自由にはならない、何でも彼でも、妹の世話にならなければならないのだから、ぢつと胸を壓へて、目を瞑つて見ぬ振りをしてゐた、何事も聞かない樣子を裝ほつて居た。

默つて、良人と妹のすることを見てゐた。

勿論、さうするより外に仕方はなかつたのである、夜着の襟を嚙んで、冷たい涙を流したことがいく度あつたか知れない、あれも言つてやりたい、恁うも恨みたいと、いく度思つたか知れないが、然し、どうすることも出來なかつた。

然し、どうせ自分は死ぬのだから、死んだら、まだ四十になるやならずの珠太郎が一人でゐられる譯のものではない、その時になつて、他から後妻を貰ふよりも、妹のお八重ならば……と考へることが無いでもなかつた、が、それを自分の口からは口惜しさが先立つて言へなかつた。

『本當にお前、よく親切に兄さんを世話をしてくれるね、わたしはお前がゐてくれるので、此の世に思ひのこすこともなく死んでゆかれる、お禮を……お禮を言ひますよ。』

と、厭味を言ふこともつた。

『御禮ですつて……何もそんな厭味をいはなくつてもいゝでせう。』

『厭味ぢやない……本當だよ。』

といつて、花枝はほろ〳〵と泣く。

『泣きながらお禮を云ふものがありますかね、姉さんが御病氣なら、妹のあたしが兄さんのお世話をするのは、普通ぢやありませんか。』

『普通だつて……えッ、普通だつて、お八重……』

と、花枝は口惜しさうに言つた。

『普通ですとも……でも、そんなに私のすることがお氣に入らないんなら、姉さんが早くなほつて御世話したらいゝぢやありませんかね。』

と、お八重は冷やかに言つた。

『お八重ッ。』

と、恐ろしい形相になつた、恨みを言はうと思つても、情が激して、胸が追つて、言葉は口の外へは出なかつた、カッとして血を吐いた。

『あれ、姉さん。』

と、さすがにお八重も蒼くなつて、駈けよつて背をさすつた、花枝は苦しさうに身を悶えて、ゴホン〳〵と咳き入つた。

『兄さん〳〵。』

お八重は青くなつて呼んだ、珠太郎は何ごとか起つたかと、これも顏色を變へて入つて來た。

『どうした？』

『姉さんが……』

と、お八重はその儘身をすべらして、病室の外へ出た。

『どうした？　苦しいかい』

と、珠太郎は花枝の背を撫でた。

花枝は物も言はず、口惜しげに、珠太郎の顔を見てゐたが、苦しさうにせい〳〵言つて荒い呼吸づかひをしてゐた。

『薬を飲んで見るか。』

花枝は首をふつて、

『投といた下さい……あたしは何せ死ぬんだから……』

『何を言ふのだ。』

『死んだら……あたしが死んだら、あなたはお八重……お八重と夫婦になるんでせうね……ね、さうでせう。』

『何を下らないことを言ふのだ。』

『どうせ一人ぢやゐられないぢや有りませんか……どうせ後のお女房さんを貰はなくつちやならないんだから……そしたらお八重と夫婦になつた方がいゝ……。』

『何を下らないことを言ふのだ、死ぬと決つちやゐまいし、早く薬を飲んで快方なつてくれ。』

『あたしは助からない……どうせ死ぬんだから……あなたはお八重を女房に持つて下さい……』

『何をいつてるのだ。』

『その方が都合がいゝ……外の人を貰ふより……お八重ならあたしも安心して死んで行かれる……』

『おい、もうよしな。』

たまらなく成つて、珠太郎は震へるやうな聲で、押かぶせるやうな調子で言つた、夜着の襟に顔を埋めて、花枝は苦しそうに伸いた。

その、低い呻き聲をきいても、珠太郎は何となく、底寂しい氣持がして仕方がなかつた。

二〇 迷へる心

『あれッ、こわいッ。』

と、花枝は、不意に物に襲はれたやうな聲をあげて、夜着をはねのけて飛び起きた、その顔の色の物凄さに、そばにゐた女中が、青くなつて逃げ出した。

『大變ですよ、大變ですよ。』

と、轉げるやうに飛び出した。

もう一ぱし奥樣になりすましたお八重は、長火鉢に身を凭せて、柳山人の小說に讀みふけつてゐたが驚いて顧みた。

『どうしたのさ、騷々しい。』

『奥樣が大變です……』

と、尙恐ろしげに奥を見た。

さては急に變でも來たのかと、お八重も周章て奥へ行つた、見ると、花枝は、口が耳まで裂けてゐるかのやうな恐ろしい形相になつて、臥床の上にちやんと起き直つてゐた。

『姉さん如何したのです。』

と、お八重も恐ろしげに叫んだ。

『……勘忍して下さい……わたしが惡いんです……』

と、花枝はよろ〳〵と立ち上つた。

『あなた、早く詫つて下さいよ、わたしばつかりが惡いんぢや無い……貴方だつて……ですから早く御詫びして下さい……わたしはもう苦しくつて仕方がない……』

と、病みほうけて、立つことも出來なかつた花枝が、あらぬ方をきつと見据へながら飛び出さうとするのだ。

お八重は、はッとして頭から冷水を浴せられたやうに、慄然として姉の袖にとりすがつて、力をこめて引きもどそうとしたのを、ずる〳〵と引ずつて駈け出すのであつた。

『あれまあ、姉さんッたら。』

お八重は肝高に叫んだ、恐ろしさと物凄さに手足に力も入らないので、引ずり行かれながら泣き聲をふりしぼつた。

『私が惡い……私が惡いんです、盗つたお金はかへします……勘忍して下さい、勘忍して下さい。』

と、花枝は繰りかへしていひながら、座敷のうちをくる〳〵と駈けめぐる、力も盡きはて〻、お八重は、手を放してそれを見てゐるばかり、何することも出來なかつた。

その目は、底に物凄い色を宿して光つた、その聲は、目に見えぬものを避ける悲痛な心の叫びであつた。

『姉さん、如何したといふのです。』

と、袖をとらへて、強いて其所へ寢かせやうとするお八重を、花枝は物凄い目で白眼んだ。

『お前は何だよ。』

『わたしはお八重ぢやありませんか。』

『お八重つてえ因かい、わたしはそんな人は知らない、彼方へ行つといで。』

と、力なく、ぐたりと横になつたが、手足をふるはして、

『……勘忍して下さい……わたしたちが悪いんです……わたし達が殺したも同然なのです……悪い、悪い、悪いことをしました……どうか勘忍して下さい。』

『仕方がありませんわね。』

と、お八重は泣き聲を出した。

お八重には何が何やら分らなくなつた、あらぬことを口走つてゐるのが、どうした譯かちつとも見當が付かなかつた、さすがに姉を見殺しにしやうといふ大それた惡い考へもなかつた、電話で珠太郎を店から呼び戻した。

珠太郎が歸つて來たときには、花枝はもうスヤ〳〵と眠つてゐた、病みつかれて、生きた人のやうな樣は少しもなかつたが、それでも、今の今まで事情の分らぬことを口走つて、座敷中をかけめぐつてゐた人のやうには思へなかつた。

『どうしたのだ、一體。』

と、珠太郎はきいた。

『如何つて、大變なんですよ、勘忍してくれの、私たちが惡いんだの、あたしが盜つたんだの、盜つたお金はかへしますのつて、それは〳〵……』

と言ひかけて、お八重はその美くしい眉をひそめた。

『盜つた金？。』

と、珠太郎はぎつくりした。

『そして、寢てゐて手足も自由にならないのが、座敷中をかけめぐるんですもの、本當にひどい力つたらありやしない、わたしをずる〳〵引ずつて……』

『さうか、困つたものだ。』

『ねえ兄さん、わたし、とても姉さんの看病はしてゐられないわ、もう〳〵本當に……困つて仕舞ひます。』

といつて見上げた、その目が美くしく珠太郎の心に喰ひ入るやうだ。

「……」

「わたしを如何して下さるんです。」

と、またぢろり。

「ウン、心配するな、おれもいろ〳〵考へたことがあるから。」

「わたし、もう、一日も此家にはゐられやしないわ。」

と、お八重は珠太郎の膝に泣き伏したのである、珠太郎は默つてその背へ手をかけて、さすがに太いため息を吐くのであつた。

二　獨身主義

子爵家の令嗣として、英國仕立の紳士として、柳原綱舘は大分世間に評判がよかつた、その柳原が、三十四といふ相當の年配になつてゐて、それでまだ獨身であるといふことも、大分やかましい世間の評判に上つた。

女嫌ひだと云ふ評判もある、偏物だと云ふ噂もある、失戀の結果獨身主義を通してゐるのだといふ者もあつた、その相手は英國にゐた頃馴染だ金髪美人だと見て來たやうなことを言ふものもあつた。

「何故結婚しないのか。」

と折ふし仲のいゝ友達が云ふと、柳原は苦い顔をして横をむいて仕舞ふのだ。

「結婚しろ。」

と、追ひかけるやうに勸める者もあつた。

「厭だ。」

「何故厭だ？」

「敢て君の知つたことでは無い。」

『素氣ない男だ。』

と、誰でも呆れて口を噤んで仕舞ふ。

然し、父の子爵も老年ではあるし、子爵家の後嗣を絶つといふことも心配になるので、その方面から説いて來る親族もあつた。

『いゝ加減で妻帶したら如何かな。』

『御免蒙ります。』

『お前はそれでもよからうが、柳原家は如何する、鎌倉幕府以來の名家たる柳原家が絶えて終ふといふことは、先祖に對してる濟ない譯ぢや無いか。』

『養子をしたらいゝでせう。』

斯ういふ返事だ、取りつく穂もなく默つて終はざるを得ない、友人も親族も、呆れて口を出すものは無いやうになつた。

父の子爵も、母の子爵夫人も、何故か自分からは強いて妻帶を勸めなかつた、そ

してこの子爵親子は、世間へ對しては親切で、柔しくつて、同情があつて、評判はよかつたが、家の中にゐてはいつも氣まづい、寂しい顏を見合せて居るばかりであつた。

所が、此所に斷はるに斷はり切れぬ結婚談が持ち上つて來た、それは立憲民友會の總裁として、勢威世に時めく鵜澤篤藏侯の令嬢を貰はぬかといふのだ、鵜澤侯の令嬢も柳原ならば進んで嫁たいと言つてるのださうだ、鵜澤侯は維新の功臣として令名があつたばかりでなく、實に柳原子爵の今日あるのは鵜澤侯爵のおかげだといつても差支ない位なのである。

それも媒介者があるのぢや無い、柳原子爵と、鵜澤侯爵が、ふとした酒の上から、

『貴公、子息があつたそうだの。』

『たつた一人……偏屈で仕方がない。』

『左樣いふ話は聞いてるが、どうだ俺の娘を貰つてくれないか。』

『どうも、わしの一存には行きかねるのでな……困るのだが……』

と、子爵は頟をなでる、侯爵は構はず大きく首肯いて、

『人間は相當な年配になつたら結婚しなくつちや不可い、何時まで獨身でゐては宜しくない、第一自分も不自由だし、世間からも誤解される、元來、君の子息のやうな偏屈な男は世話を燒いて押しつけて終はなければ、生涯貰ひはぐれて仕舞ふものぢや。』

「それも左樣ぢや。』

『第一、柳原家の後を絶つといふことは、先祖に對しても不孝ぢや、皇室の藩屏たる貴族の家に不孝な子が出來たとあつては不都合千萬ぢや。』

早呑込みで、おまけに世話好の鵜澤侯爵は、綱館が何時まで獨身でゐるの、その偏屈なせいからだと思つてゐる、子爵の用ふべきを用ひた侯爵は、子爵の後嗣たる綱館の有爲の人物だといふことを察して居た。

「わしからも話をするが、貴下からも一應伜へ御話し下さらんか。』

『よし〳〵、吾輩が大に說破してやらうから、いつでも寄越し玉へ、いや、偏屈だといふから、吾輩自分から折を見て訪問しやう。』

「どうか。』

と、子爵は頭を下げた。

默つてわが子の態度は見てゐても、何時までも妻帶しないのが、氣になつて仕方がなかつた、鵜澤侯爵といへば國家の元老である、機智に富んで、しかも大量で、雄辯家で、人心を左右するのに妙を得た侯爵が說いたならば、綱館も承知するだらうと思つた。

ある日、侯爵はさりげなく柳原子爵を、その番町の屋敷に訪ねた、丁度子爵はゐなかつたが、綱館は書見をしてゐた、案內もまたず綱館の部室へ行つた。

三　侯爵の娘

『や、御勉強かな。』

と、無遠慮に親しく言つた。

綱館は此の人の位置と人格をよく知つてゐた、本を置いて丁寧に挨拶した。

『や、そう改まつて貰つては困る。』

と、侯爵は磊落に言つて、そこへ坐つて葉卷を吹かした。

『父は不在ですが。』

『いや、今日は君に御願ひがあつて來たのぢや。』

『私に？』

と、柳原は不審さうにこの國家の元老の、老いて尙活氣に滿ちた若々しい顏を打

ち仰いだ。

『さうぢや、君に御願ひしたいことがあるのだが、きいて貰へまいかな。』

『何ですか。』

『君は大變偏屈ださうぢや。』

『これは恐れ入ります。』

と、柳原は苦笑した。

『蔭ではよく人がさういつて惡口を言ふのを知つてゐても、恁う面と向つて君は偏屈だと言はれると、餘りいゝ心持はしない、傍若無人の老侯爵の顏をぢつと眺めて、柳原は再び苦笑した。

『然し偏屈はいゝ、今の若い者で、餘り丸く如才なく出來上つてるのは、覇氣がない、大きい所がない、偏屈は結構ぢや。』

『餘り結構でも無いやうです。』

『はゝゝゝ、そんな弱い音を吐いては不可、あくまで偏屈を通す心組でゐなくつちや不可い。』

『そこで御用と仰有るのは？』

『何さ、何所までも偏屈であつて欲しいといふことぢや、はゝゝゝ。』

と、侯爵は哄笑した。

それから詰らぬ世間話をして、煙のやうに歸つて行つた、何が何やら分らなくつて、綱館は丸で狐にでもつまゝれたやうな氣持がして居た。

それかれ二三日經つて、柳原は父子爵の代理で鵜澤侯爵を訪ねた、しみじみ話し合つて見ると、とにかく足輕から起つて大勳位侯爵といふ樞要な位置にある人だけに、何所か凡人に計り知れない偉大なところがよく分つた、話が濟むと、

『君は何故妻帶をしない。』

『何故といふことも在りませんけれども、何うも氣に入つた女がありませんから。』

『大きなことを言ふな。』

と、侯爵は頭から押しつけるやうに、

『氣に入つたのがあつたら貰ふか。』

『ある譯が在りません。』

『左樣すると、君はやつぱり人の噂にあるやうに、英國にでも待つてる女があるんだな。』

『そんなことは有りません。』

『然し、日本に女はまづ六千萬人の半分として、三千萬人、その內子供や人の妻が二千萬人あるとして、一千萬人の女の中に氣に入つたのが無いとは、ちと言ふことが大きいぞ、はゝゝゝ。』

と、侯爵は笑つて言葉を次いで、

『もつとも、鐵の草鞋で探してあるく譯にも行くまいが、一人や二人はこれはと思

つたのがありさうなものぢや。』

『一人ありましたが……』

と、つり込まれて口をすべらした。

『一人あれば結構ぢや、二人も三人もあつたところで仕方がない、わしが媒介の勞を取らうぢや無いか。

と、侯爵は得意さうに笑つたが、柳原は默つて横をむいた。

『有り樣はわしに娘がある、それを君にやりたいと思つた、娘も嫁きたいといふのぢや……が、然し君に氣に入つたのがあるのなら、敢て娘を勸めはしない、その氣に入つた女を媒介しやう、一身分の低いものならわしが親元になつてもいゝ、どうだ、此の邊で妻帶したら……』

侯爵はしんみりした調子で言つた、柳原は默つて侯爵の言葉を聞いてゐた、自分の娘をくれるつもりだつたが、好た女があつならそつちを世話をしてやらうといふ

侯爵の心が、何とはなしに奥ゆかしく感じられたのである。

『ま、考へて見ます、何れ父親とも相談して見て。』

大がいの場合、素氣なく跳ねつけるのを、さすがに無下に斷る程の偏屈心も出なかつたのである。

『はゝゝゝ。』

と、侯爵は笑ひ出した、突然なので柳原は變な顏をした。

三三　昔の戀人

『君は變なことをいふね。』

と、侯爵はにや〳〵しながら、

『わしは、君に妻帶を勸めるのぢや、君の父親に妻帶を勸めてはゐないよ。』

『はい。』

『君自身のことだ、何も父親に相談する必要はないぢや無いか。』

『はゝあ。』

と、柳原は小首を傾けた。

『此の際妻帶し玉へ、その氣に入つた女を媒介の勞を取らうといふのぢや。』

『昔は氣に入つた女があつたといふのです。』

『今は？』

『何しましたか、或は死んだかも知れません、いや、死んだでせう。』

と、暗い影が、その眼の底を動いた。

『死んだ？』

『と思ふのですが……十五六年消息を聞きませんから……』

と、言ひかけて暗然として顏をそむけたが、急に氣を變へて腰を浮かして、

『飛んだことを申上げました、それでは失禮いたします。』

『まあ、いい。』

と、袖をおさへるやうに、

『も少し遊んで行き給へ。』

『また悠然伺ひます。』

と、もう立ち上つた。

考へ直して侯爵も惡どめはしなかつた、自から玄關先まで送つて出た、さういふ所は磊落で、豪傑風があつた。

『どうも恐れ入ります、わざ〳〵御送り下さらないでも……』

『いや、來客に對する禮ぢや。』

と、侯爵は事もなげに言つて、

『今の話によると、現在氣に入つた女はまづ無いんだな。』

「そんな事は何でもよう御座います。」

「よくは無い、如何だ、吾輩の娘は氣に入らんか。」

「はあ。」

「いやさ、貰つてくれる譯には行かないか、どうせ不束な娘だから、御氣には入らないだらうけれども。」

「そんな事はありません。」

「ぢや氣に入つてるか。」

「とにかく、考へさせて下さい……少くとも私も、從來の態度を改めるつもりでゐますから。」

「左樣か。」

と、ぢつと見て、追究するやうに、

「先づ承知したものと見て差支ないな。」

「……」

柳原は何とも返事はしなかつた、然し、初めからの態度で、鵜澤侯爵は、もう全然承知したものと信じて終つた樣子である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

話がドン〳〵進捗して行つた。

柳原が知らないでゐる間に、父の子爵と、鵜澤侯爵の間には、着々として話が運んで行つた、子爵夫妻の眉が、何十年ぶりかで喜悅に開いた、家の中が急に明るくなつたやうだ。

柳原は默つてそれを見てゐた、少しも口を出して異議を言はないのは內々はもう承知してゐるかも知れない。

此の上はもう表立つた媒介人を入れて、來年匆々にでも結婚式をあげるといふまで話が運んでゐた、今年は侯爵の令嬢が十九の厄年なので、來年の春がよからうといふ、そんな打合せまで濟んだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

呑み疲れて、醉ひつぶれて、柳原はそつと座敷を抜けて一座を外した。

同じ華族の若様たちの忘年會が、柳橋の龜清樓で催されたのは、十二月もまだ十日にならなかつた、座中の花形で、おまけに近く政界の大達者、鵜澤侯爵の令嬢と結婚しやうといふ噂のある所なので、四方八方から盃が降つて來た、飲む程に乾す程に、正座してゐられない程に醉つたので、さてこそそつと抜け出したのである。

奥の小座敷へ横になつたと思ふと、忽ちに前後も知らず眠つて終つた、ふと女中に起された時には、もう仲間も大がい歸つてしまつて、時は一時に近かつた。

『お伴でも。』

と、龜清の女中がいふのを、

『何有、夜風に吹かれながら行かう。』

と斷つて、龜清を出るとぶら〳〵と歩いたが、二三町來ると、消魂ましい女の叫び聲をきいた。

二四　女の操

滿天の星、風肅々として寒い、月が、鎌を研ぎすましたやうに、中空にかゝつて居るのが、何となく肌にしみる、大川の瀬の音が、その空に響いて高く聞える……

人通りもない、車も行かない、道寥々たる冬の夜、遠くの方で夜番の拍子木が鳴つた。

『冗談ぢや無いわ。』

と、卒然として女の聲がした。

柳原は、きつと足を踏みしめて、その聲のする方を打ち仰いだ、黑い塀をめぐらした一構へ、雨戸はすつかり立て切つて、その隙から灯が細く、庭の木立に流れてゐる。

其の二階から女の聲がするのだ、續いて男の太い聲が聞えた。

『冗談ぢや無い、眞實お前に惚れてゐるのだ。』

『置いて下さいよ、こんな婆さんに何をいふんです。』

『お前がお婆さんなら、世の中に若い女はありやしない。』

『馬鹿らしい。』

と、嘲けるやうな調子である。

『何とでも言へ、今夜どうしたつて返事を聞かなくつちや成らない。』

『返事は……是までだつて言つてるぢやありませんか、わたしや蕎は賣つても身は賣りません……私の心は何時まで經つても變りはし無い……』

『きつとだな。』

『たとへ此の儘殺されたつて、誰があなたの言ふことなんか聞きますか。』

『男の意地だ、どうあつても聞かせる。』

『何が男です、人を欺してこんな所へ呼んで、心に從はせやうなんて、そんな卑怯な男がありますか。』

『戀のためには卑怯にもなる。』

『何が戀です。』

と、女の聲は激して、

「わたしにだつて戀はあります、生命よりも大事な戀があります、その戀人より他には、誰が何といつたつて此の心はゆるしません、金づくや力づくで、倒れてしまふやうなそんな意氣地の無い戀ではないんです。」

『大層なことを言ふな、そりや堅氣の娘のいふことだ、何の藝者が戀呼はり、生意氣千萬な。』

『生意氣な女に、何故思ひをかけるんです。』

と、女は何所までも嘲笑つてる。

「何だと。」

『藝者こそしてをれ、私の心は固氣です、まだ十六か十七の小娘の時から、しつかりと守つて來た女の操を、今になつて、投出して堪るもんですか。』

『何が操だ、利いた風なことを言ふな。』

『大切に、生命よりも大切にして來たのは、可愛い戀人に逢ひたいばつかし……

……何の、お前さんのやうな男のために投げ出すやうなそんな安い戀ぢや無い。』

「よし、嫌つたな。」

『今に初まつたことぢや無いわ、イケ好ないつたらありやしない、誰がお前さんのやうな俄成金の自由になるものか、わたしにだつて覺悟があるわ。』

『覺悟？　どんな覺悟があるのだ。』

「……」

「逃げやうたつて逃げられはしないぞ、戸はしめ切つてあるし、女中たちは呼んだつて來やしないし、此家は唯の料理店とは、ちと性質が違ふのだぞ。」

細い凛とした女の聲に、太い、憎々しい男の聲が聞えた、柳原はぢつとそこに立つて耳を傾けてゐた、客が、顧負の藝者を呼んで心に從はせやうとする、藝者は他に戀人があるので言ふことを聞かない……何やら男は暴力にでも訴へ兼ない樣子である。

生命にかへても操守らうとする女の心は、人事ながら涙のこぼれる程嬉しい。見逃しには出來ない、助けてやらうと突嗟の間に考へた。

そして表へ廻つて、玄關の格子をトン〳〵と叩いて、

『こら〳〵、開けろ〳〵。』

と、聲高に叫んだ。

中では急にざわ〳〵と騒ぎ出した、警察官が來たのだと言ひ罵る聲も聞えた、ばた〳〵と駈ける音、戸を開けたり締めたりする音が騒々しく聞えた。

『こらッ、開けないか。』

と、尙も聲高に叫んで、しきりに戸を叩いたが、その内に力任せに押すと、格子戸はみり〳〵と音がして玄關の入口に倒れた。

二五 紅い灯影

物も言はずに中へ飛び込んで、ばた〳〵と駈け上ると、二階の入口の方の障子がさつとあいて、そこの低い階子を轉がるやうにして降りて來た一人の女があつた。

『まて、こら。』

と、男の姿が階子の上に見えた。

女は、階子を下りると、體を縮めて前蹋みになつて、裾のかへつた膝前の、緋の長襦袢を白足袋の爪先で蹴かへしながら、長い裾模樣の裾をするゝと引ずつて飛んで來て、柳原のゐるのに氣がつくと、はつとしたやうに目を伏せた。

『御免下さい。』

客とでも思つたのか、小聲でいつて、其の儘身を擦り拔けるやうにして、ばたばたと表の方へ駈けて行つた。女を助ける心組で入つたのだから、女さへ逃げればもうあとには用は無いのだ。柳原も續いて外へ出た。

女中や、召使らしい男が五六人、あつけにとられて見てゐたが、巡査ではないと氣がつくと、急に氣が强くなつて後から追ひかけて來て、

『此の野郎、待て。』

と、むづと腕をとらへた。

『太い奴だ、貴樣は何だ。』

と、先刻の客らしい聲もした。

柳原と、五六人の荒くれた男たちと格闘が始まつた、逃げ出した藝者も、自分のためにと思ふと氣にかゝつたと見えて、また戻つて來た、その時、柳原は男たちを投げつけて、打ち倒して、悠々として外へ出て來た、もうあとを追ひかけるものも無

かつた、藝者はそれと見ると、駈けよつて丁寧に腰をかゞめて御辭儀をした。

『有難うございました、おかげ樣で助かりました。』

と、女は、まだ動悸のする胸を撫でながら言つた、柳原はさりげなく落ちついて、

『何有。』

と、輕く言つた。

『あの、ちよつと御寄り下さる譯には行きますまいか、御手間はとらせません、御出花でも召しあがつて御休息なすつて……』

『さあ、とにかくお宅まで御送りいたしませう、危險ですから。』

『どうぞ。』

と、言ひながら、藝者は柳原と並んで歩き出した、星の光、月の影、つめたい風が地を吹きまくつて居る。

『御怪我が無くつて結構でした。』

『本當に、あなた樣の御かげで……もしもの事があれば、生きてはゐない心組でゐますけれども……いつでもそれまでにならない內に不思議と助かります。』

と、藝者は微笑しながら言つた。

『度々？。』

と、柳原は首を傾けて、

『こんな事に度々あられちや堪りませんね。』

『初めのうちはよくありましたが、それでも近頃では大がいわたしの氣質も呑み込んで下すつて、まあどうやら斯うやら無理をいふ方も尠くなつたのですけれども。』

『何によらず、自分の志を立て通さうとするには、最初の一二年の我慢が大切なんですね。』

『本當に左樣で御座いますわね。』

と、言つてる內に、とある路を曲つて、意氣な格子戸の前に立つた、あたりの家はみんな眠りに就て軒燈の灯がぼんやり點つてゐるのに、此家ばかりはまだ雨戸もしめないで、家の內には明るく灯が輝いて、艶めいた女の聲が洩れ聞えてゐる。

『此家で御座います、どうぞ御入り下さいまし、さあ、あなた。』

と、言ひながら藝者は格子戸をあけた。

柳原は默つて軒燈を見てゐた、月の家といふ文字が鮮やかに讀まれる、古い記憶をたどつて、柳原は夢心地で立つて居るのであつた。

『もし、あなた。』

と、藝者は重ねて促して、家の中から射す華やかな、明るい電燈を正面にうけた柳原の、凛々しい顏をぢつと眺めると、その淸しい眸になつかしげな色が動いたが、わざとさあらぬ體で、

『どうぞ、御上り下さいまし。』

と、横をむいて言つた聲は、何故か震へてゐた、柳原はさりとも氣がつかず、案内される儘に家へ入つて、やがて二階の一室へ通された。

勧められた座布團の上に座つて、何心なく床の間の掛物を見た時に、柳原はハッとして驚いた、そして、我にもあらず立ち上らうとした時に、膝にすがつてわつと泣き聲をあげたものがあつた。

『あなた、御久しう御座います。』

二六　心中立

『何を言ふのです。』

と、柳原は又更に驚かされた、何の氣なしに同道して來た藝者が、自分の膝に泣

きふしてゐる。

『どうしたのです。』

『床の間の掛物を御覽下さいまし、欄間の油畫を御覽下さいまし。』

と、藝者は恨めしそうに、涙の眼で見上げた、美くしい顏が涙に濡れて、をくれ毛がふりかゝる艶かさ、綱館はちつと眺めて、そして更に掛物を見て、油畫の額を見て、そしてまた女を見た。

『おお、お前は。』

『妻で御座います、あなたの妻のお妻でございます。』

『ウム、お妻だつたか。』

と、柳原は思はずはら〳〵と涙をこぼした。

『若様……逢ひたう御座いました。』

『おれも……おれも……』

と、柳原は情が迫つて、あとの言葉が續けられなかつた。

『あなた、あなた。』

と、淺妻は心の底から絞り出すやうな聲で言つた、これも情が激して、俄かには落ちついた言葉も出せず、嬉し泣きに泣いた。

『よく健在でゐてくれた……おれは……おれはもうお前は此の世にゐないものとばかり思つて居た……』

『あなたに御目にかゝりたいばつかりに、辛い浮世に生き永へてゐました。』

『感謝する、感謝する。』

と、柳原は叫んで、

『お前の心に、おれは感謝する、お前の情におれは感謝する、お前はよく操を守つてゐてくれた、こんな社會にゐて、よく、よく女の道を守つてゐてくれた、感謝する、おれは嬉しい、嬉しい……』

『その御言葉が聞きたいばつかりに、わたしは、わたしは……わたしは生きてました、嬉しい、わたしだつて嬉しいわ、あなたの御膝で、此の儘死んでも、もう恨みはない。』

『この掛物は僕の落書だ……この油畫は僕の肖像だ……お前の心は、涙のこぼれる程嬉しい……』

『あなた、是を見て下さい。』

と、淺妻は懐中から更紗の袋に包んだ一尺ばかりの長さのものを出した。

『何だ。』

『見て下さい、わたしの心意氣です。』

擴げて見ると、中から白鞘の短刀が出た、柳原は呼吸もつまるかと思つた、そしてぢつと淺妻を見た。

『わたしは、いつでも御座敷へそれを持つて行きました。』

「わかつた〳〵、お前の心はよく分つたよ。」

「あなた！」

「お妻、お前はそれ程おれを思つてゐてくれたんだね、お前を捨てたおれを……

……」

「あなたが惡いんぢやありません……あなたの御心はわたしもよく知つてます、知つてます、知つてます、ですから、御目にかゝる時を樂しみにして……」

何時の間にか、良人の胸へ顏をうづめて、泗せかへりながら物を言つてゐた女は、その儘する〳〵と頭を落す。

「お妻、お妻、しつかりしなくつちや不可いよ、如何したのだ。」

と、柳原は兩手でお妻の頭をおさへて、抱くやうに持ち上げた。

「いいの、何でも無いの、わたし、嬉しくつて……貴下に御目にかゝつたのが嬉しくつて……わたしの心があなたに通つたのが嬉しくつて……何だか氣が遠く

なるやうですわ……あなた……」

「……」

「わたし、此の儘死んでももういゝ、十五年の間願つてゐたことが叶つたのだから……もうちつとも思ひのこすことは無い……」

と、淺妻は、我が夫の腕に身を任せて、恍りと顏を見上げてゐたが、やがて次第に細く、閉ちられて行く……半ば夢心地で、甘へるやうな態度である、宛で、子供が目をさましてなつかしい母の懷を探ぐるやうな甘へやうである。

十五六年の昔、浮世の義理に仲を絶たれた戀人が、ふとめぐり逢つた嬉しさは、當人同志より他に誰が知つてゐやう、靜かに夜が更けて行く、相愛の二人は、何もかも忘れて、昔の戀をお互ひの胸に描いてゐた。

二七　追憶の涙

十五年ばかり前のことである。

東京の片田舎、龜戸の町にお雛様のやうな美くしい若夫婦がゐた、良人は二十ばかり、妻は十七八、本當に人形のやうな夫婦であつた。

男は父親に早く別れて、母親と寂しく、しかし困らない生活をしてゐた　その母親が臨終の際に、その遺言通り、男は遠縁の娘のお妻と結婚した、二人は戀仲であつたのを、母親は知つてゐた、母親を失なつた悲哀よりも、思ふ同志で夫婦になつた嬉しさが、お互の心に一ぱいであつた、母親の遺した財産があつたので、二人はのん氣に、幸福に日を送つて居た。

然し、その喜びの日は長くは續かなかつた、その頃、政界一方の頭領として、鵜

澤侯爵の片腕として、勢威世に時めく柳原子爵は、男の子を三人までも病魔に死なせて、その嗣子の無いのに苦しんでゐた、そして新聞に廣告して、かつて子爵が情をかけた女を求めた、その女には子爵との間に一人の男の子がある筈であつたが、子爵夫人を憚かつて縁を切つてゐた、その新聞の廣告を見た時から、若い夫婦の家庭に暗い影がさして來たのである。

男の母親は實に柳原子爵の愛妾であつた、男は柳原子爵にとつては、今はもうたつた一種の後嗣だつた、その後嗣を守り育てゝ女は獨身生活を送つてゐたのである、それが分ると、男はどうしても子爵家へ入らなければならなくなつた、生さぬ仲の子爵夫人が懇望するといふことが、いたく男の心を動かして、彼はとう〳〵柳原家へ入るのを承知するやうになつた。

『すぐ迎へに來る。』

と言つて、彼は最愛のお妻と別れた。

お妻は、それを楽しみにして、ひとり寂しく待つてゐた、然し、待つてゐた消息は少しもなかつた、心細さと遣瀬なさに、お妻は寂しい月日を送つてゐた、待つ消息はなくつて、柳原家の家扶といふ立派な人が尠からぬ手切金を持つて、忌はしい話をもたらして來たのである。

お妻の心は、消えも入りたい程悲しかつた、何事を思つたり考へたりする間もなかつた、是非とも良人に逢つて、別れるとしてもそれから別れたいと言つたが、それも許されなかつた、家柄とか、身分とかいふことを考へると、押してそんなことを願ふのが、自分に子爵夫人になりたいと云ふ心があつてからのことと、痛くもない腹をさぐられるのが厭さも手傳つて、どうしてもお妻は良人に別れねばならぬ破目になつた。

たゞ、良人の綱館から何とも消息がないのが物足りなかつた、然しまた考へれば、消息の無いのが嬉しくもあつた、良人が何事も知らぬ間に、他の人が何やかや取り

計つてゐるのだらう……良人の心は今も昔も變りはないのだと、心の底に明い光も閃めくのであつた。

然し、とにかく綱館からは消息はなかつた、その内に柳原子爵の令嗣綱館が英國ロンドンへ留學するといふことが新聞で傳へられた、せめて他ながらでも見送りたいと思つてゐたが、その時、お妻は綱館の胤を宿してゐた。

生み落した子は、やはり柳原家の家扶といふ人が來て、邸で育てるからといつて、藁の上から引きとつて行つた、良人に別れ、頼みに思ふ娘まで奪はれたお妻は、寂しさ辛さ果敢なさに、いく度死を決したか知れない、然し、いく分か心の底には良人を信ずる思がのこつてゐた、綱館は何にも知らない、身分とか家柄とかいふことを重んずる人々が、よつて集つて二人の間を駈け距てるのだと、深く信じてゐた、そしていつかは綱館に逢へるといふことを心頼みにして、寂しい浮世に永へて來た。

藝者に出たのはそれからのことであつた、恐ういふ商賣をしてゐれば、何時かは思ふ男にめぐり逢へるといふ望みもあつて……網館の遺して行つた財産があつたので、他の藝者のやうに前借があるでなし、無理なつとめをする必要もなかつたので、顔の美くしさと、網館の母親から仕込まれた藝の冴えが、忽ちの間に芳町でも指折の藝者になつた。

夢の間に十年の月日が經つた、英國へ行つた柳原は、ついぞ歸朝したといふ噂を聞かなかつた、彼女の夢は、毎夜々々ロンドンへ飛んで行つた、そして生み落したばかりで顔もしらない娘のことを思ひ惱んだ。

「月の家といふ名は、あなたの御好きな『浪枕ら月の淺妻』からとつたのです。」

と、いつて淺妻は泣いた。

濱町河岸で、深夜ふと逢つて、別れてしまつてからそれが絶えて久しい良人であることを知つた、英國から歸つてゐることもそれで知つた、人の噂さで、父母や親

族が妻帶をすゝめても、獨身で通してゐるといふことも知つたのである。

「その時……その時……わたしはどんなに嬉しかつたか知れません。」

と、思ひ出して莞爾と笑つた。

二八 嬉しき緣

「隨分お前も苦勞した。」

と、話をきいて終ふと、柳原も涙をぬぐつてしみじみ言つた。

「いゝえ、私の苦勞なんぞ……あなたも如何にか……」

「お前が左樣いふ苦勞をしてゐやうとは、おれは些とも知らなかつた。」

と、柳原は暗然として涙を飲んだ。

子爵家の世嗣たるに恥かしからぬ學問を修めて來るために、英國へ留學した柳原

は、留守中に如何なことがあつたか少しも知らなかつた。

『お前の妻や子供はおれがしつかり預かつて置く、後の子爵夫人に恥かしくない教育をしてをく、だから安心して勉強して來い。』

と、父の子爵も言つた、母の夫人も言つた、出立に際してたゞ一目逢ひたかつたが、それを言へば男らしくないと思はれるだらうと、ぢつとこらへて海の外へ出かけた、父と母の言葉を信じて彼は勇しく海外へ出かけた。

子爵夫妻は、自分の子を愛するがために、自分の家柄を重んずるがために、自分の可愛い子の信仰を裏切つた、綱館からお妻へ届けられる筈の手紙は、みんな破られてしまつた、お妻のやうな女が子爵夫人になる資格はないと思つて居た、そして家扶をつかはして、無理やり縁を切らせた、あだかもそれが綱館の意志である如くに言つた。

綱館へは、程經て、お妻は難產に苦しんで、產後の肥立が惡くつて死んだと言ひ

やつた、生れた娘は里親に出したと言つて遣つた、すぐに飛んでも歸りたい程に綱館は思つたけれども、海を距てた遠い國にゐてはそれも自由にはならなかつた、別れさへしなければ恁んなことにもなるまいと、私かに悔ひもした。

英國から歸ると結婚談が持ち上つた、彼は一々謝絕してゐた、ふとしたことからお妻に就て、父の子爵が言つてよこしたことが、すべて虛僞であることを聞いてから、彼は一層頑强に結婚談を許絕した、そして、父の名と地位と、それから洋行がへりといふ彼自身の肩書によつて、政界、實業界、あらゆる方面から招聘して來たが、それすら拒絕して、風流三昧に日を暮してゐた、子爵も夫人も、それを如何することも出來なかつた、氣まづい月日を送つて居た。

柳原の志は、迚も動かし得ないと思つた時に、子爵は夫妻も初めて自分たちのしたことを悔ひた、そして、手をつくしてお妻の行方を探したけれども、何してゐるか少しも分らなかつた、今はもう死んだものと諦らめて、柳原は必私かにその後

生を吊つてゐたのである。

自分が不明だつた爲に、女一人殺して終つたと思ふと、彼は妻帶する氣にはなれなかつた、お妻は生きてはゐまい、きつと死んだらう、捨てられて、子供を奪はれて、きつと生きてはゐまいと思つてゐた。

『おれが、今日まで獨身でゐたのは、せめてものお前への手向心であつた。』

と、柳原は涙を呑んだ。

『うれしいわ……嬉しいわ……わたしや嬉しいわ……』

と、年增女の澤妻は、自分の年も忘れて、小娘のやうによゝと淚せかへる、柳原も宛で子供でも慰はるやうに、

『おれも嬉しいよ、おれも……もう恁うなつたら……おれも十五年來、初めて明るい世の中へ出たやうな氣がする……』

『わたしだつて……』

と、二人は感極つて泣いた。

『何故、おれを訪ねてくれなかつた。』

と、しばらくして柳原がいつた。

濱町の河岸でお目にかゝつて、あとでそれと氣のついた時、本當に飛び立つやうな氣持がしました、けれども、自分の身を考へて見ますと、情なくつて、情なくつて……』

『……』

『御伺ひしやう……といく度思つたか知れません、けれども、貴方のお顏にさわるやうなことがあつてはならないと、一生懸命に諦らめてゐました、でも、貴方も御獨りで被在しやるつて承はつて、どんなに力强かつたか知れません、時さへ來れば逢はれると思つてぢつと我慢してゐました。』

『その時が來た、その時が……』

『そして、わたしの切ない心持が、すつかり貴方に分つたのですから……危ふい所をあなたに助けて頂いたのですから……こんな嬉しい時はありません。』

と、淺妻はまたしても涙に泡せた。

二九 結び絲

『たゞお目にかゝつたつて、こんな卑しい稼業をしてゐては、申譯が立ちません、自分は綺麗だ、あなた一人に操を立ててゐましたつていつたつて、御分りにならなければ仕方がありません……それが自然と……あゝ……本當に自然にお分りになつて……こんな、こんな嬉しいことはない、死亡つた母様が御引合せ下すつたのかも知れない……』

と、淺妻は尙涙聲を續け乍。

遠い異郷に離れてゐればまだしも、同じ東京にゐて、良人に逢はれぬことが、どれ位苦しいことであつたか、どれ程情ないことであつたか、思ひ出しても涙がこぼれる。

『それがつて、世間ありふれた私通ぢやない、母様が御ゆるし下すつた夫婦仲なんですもの、わたしは如何なに切なかつたでせう。』

『もういゝ、もういゝ、心配するにや及ばないよ、おれは……おれはもう恁うなつたら一日でも打つ棄つては置かない。』

『……昔だつて夫婦にゐられなかつたのですもの……今だつて……今だつて……』

といひさして、淺妻は今までの嬉しさが、みんな消えて仕舞つたかと思ふ程の悲しい氣分になつた。

『あなたは御身分が御在なさる、わたしは卑しい藝者です……とても、とても夫

婦にはなれないのですね。」

「何が卑しい……してゐることは藝者でも、心持は神よりも尊い……」

「だつて〳〵……」

と、淺妻は悲しくなつて、娘のやうに駄々をこねたかつた、良人の膝にとりすがつて、泣いて泣いて涙の涸れる程泣きたいと思つた。

「心配するな、心配するな。」

と、柳原はうわ言のやうに叫んで、

「家にも地位にも換へて、おれはお前と夫婦になる、家柄が何だ、身分が何だ、生命にも換へて、おれに心中立してくれたお前の意氣地に對して、おれが家を捨てる位のことは何でも無い。」

「あなた嬉しい……その御言葉をきけばわたしはもう……今死んでもつとも恨みはありません。」

「おれは死にたく無い、おれたち二人の本當の戀の生活はこれから初まるんだ、冷たい寂しい家に、爵位と黄金に包まれてゐるより、おれは卑しい藝者家で、暖かいお前の愛に呼吸てゐた方が、よつぽど幸福だと思つてる。」

「だつて……」

「何にもいふな、おれに任せてをけ。」

「はい。」

「それにしても……里子に出したおれたちの、最初の……」

「あゝ、ほんとに娘は……娘はどうして居るのでせう。」

「何したかなあ。」

「分らないんですか。」

と、淺妻の聲は上調子だつた。

「父や母は死んだといつてるのだが、それも何だか分りやしない、きつと何所かで

生きてゐるんだらう。」

と、暗然として涙を呑んだ。

「親はなくても子は育つ……あなた、健在でゐませうか、健在で……わたしのやうな辛い商賣でもしてゐるんぢや無いでせうか。」

「健在でゐるのが幸福だか、それとも死んで仕舞つた方が幸福だか、それは分らない。」

「何といふ因果なことでせう。」

「親でも子でも、みんな苦勞をするやうに生れついたんだ。」

「本當にね。」

と、絶えて久しい夫婦は、生んだばかりで顔も知らない、生死も分らぬ娘の身の上を案じてゐた。

「娘の行方はともかくもとして、おれたちはすぐ夫婦にならなくつちや不可い、お

れは歸つて、父親にこの話をする。」

と、柳原は立ち上つた。

「あれ。」

と、淺妻は袖をおさへて、

「もう遲うござんすわ、明日の朝早くの方がいゝわ。」

「ウン。」

と、時計を見ると、もう三時を過ぎた、然し夜あけにはまだ間がある、柳原は立ちかけた腰をその儘にして迷つてゐる。

三〇 小さき爭

そのあくる日、晝近くになつて彼は目をさました、戸はもうあけてあつた、窓の障子に靜かな冬の日が白くさしてゐる、雀がちゝと囀づるのが快心く耳に響く。

柳原は恍然として床の中で目を見ひらいてゐた、階下では、若い[illegible]詰し聲が時時聞えて來る、その中に、淺妻の若々しい、明るい笑ひ聲が交つてゐた、駿たかな布團の中に恁うして寢てゐて、その聲を聞いてゐると、何だか上手の音樂に耳を浸してゐるやうだ。

大きな目を見開いてゐたのが、いつの間にか段々と瞼が重くなつて來て、若い女の笑ひ聲が段々と遠ざかつて行つて、起きてゐるともなく、寢てゐるともつかず、うつとりとして小半時を過した。

つゝましやかな足音が聞えて、淺妻のあでやかな顏が、その眸の中へ解け込むやうに映つて來た。

「まだ御起きなさらないの。」

と、笑ひながら枕許へ寄つて來た。

「今朝は日の出ないうちに御邸へ御歸りなさるつて仰有つた方が……如何したといふのでせう、まるか月のことぢや無いでせう。」

「はゝゝゝ。」

と、笑つて顏を見合せると、われ知らず微笑が頰に流れた。

邸へ歸ると、珍らしく家をあけた若殿樣を、女中も書生も不思議さうに迎へた、家令の三太夫は大事が出來たやうな顏をしてゐた、子爵夫妻は待ちかねたやうな顏をしてゐた。

「私は結婚しやうと思ひます。」

柳原は突然言ひ出した、柳原子爵は笑ひながら我子の顔を見て、羊のやうに白く長い髯を撫でた。

「當前ぢや、何故そんなことを言ひ出すのかな。」

「至急結婚しやうと思ふのです。」

「といふと、何時ぢや。」

「今日でも明日でも。」

「それは餘りに突飛だ、準備も何にも出來はしない。」

「準備などよろしいのです。」

「さうは行かん、假にも子爵家の嗣子のところへ侯爵の令嬢が來るのぢや、猫の子を貰ふやふな譯には行かん。」

「私は侯爵の令嬢と結婚するんぢや無いんです。」

「何を言ふのぢや。」

子爵は怪訝な顔をしてわが子を見た、柳原は落ちついて、

「鵜澤さんの方は御氣の毒ですが斷つて下さい、わたしは夫婦にならねばならぬ女があります。」

「何ッ。」

と、氣色を變へて、

「何を言ふのぢや、すでに約束が成立して、結婚の日取まで決つてるのを、斷はるといふことが出來るか。」

「出來ても出來なくつても斷はなければなりません。」

「何を無茶な、そんな沒常識な、不法な行爲が、假りにも國民の儀表として出來ると思ふのか、まして相手は鵜澤ぢやないか。」

「鵜澤でも芳村でも構ひません。」

「お前は今日は餘程どうかしてゐるな、それは何者だ、侯爵との先約を破つてまで

も結婚しやうといふ女は、一體何者の娘ぢや。」

「娘ではありません、藝者です。」

「そりや不可、それはよろしく無い、皇室の藩屏たる華族の嗣子が、藝者を妻にするといふことは出來ん。」

「絶對的に不可ませんか。」

「不可、強て妻にしやうとするならば、先づ柳原家を去つてからにしろ。」

子爵は決然として言ひ放つた。

「よろしう御座います、廢嫡して下さい、わたしは、家を捨てゝも、お父様に背いても、わたしの昔の妻と同棲しなければならないんです。」

と、柳原も斷然言ひ切つた。

子爵は物も言はず、ぢつとわが子の顔を眺めてゐたが、やがてはら〳〵と涙をこぼした。

「お前はお妻に逢つたのか。」

「はい。」

「何をしてゐる。」

「芳町で藝者をしてゐました。」

と、彼は悪びれず答へた。

三一　義理の柵

「然し、もう少しよく考へて見たら如何ぢやな、十何年逢はずにゐたのが、不意と出逢つて感情が激してゐるから、家も地位も捨てゝ夫婦にならうと思ふのは無理はないが……」

「考へる餘地はありません。」

『さうか、然し、お前は藝者がどういふ商賣かを考へたことがあるか、客のために嬖を賣り、時には操をすら賣るのが、彼等の歩んでゐる道ぢや。』

『少くともお妻は、世間の所謂藝者と全然別の道を歩んで來ました、十五年の長い年月を、たゞ私のためにのみ生きてゐました。』

『と、彼女がいふたのだらう。』

『私が此の目で見て來ました、此の心に感じて來ました、お妻は男も及ばない意氣で節操を守つて來ました。』

『貫被つちや不可ぞ。』

『飽くまで彼女を信じます、彼女の居間には私の落書が掛物にしてあります、私の肖像が額面にしてあります。』

『ほう。』

と、子爵は目を瞠つた。

『彼女は客座敷へ、いつも短刀を呑んで出てゐました、わたしはそれを見て來ました、わたしは鵜澤侯爵の令孃と結婚しやうとしたことを、彼女の強い意志に對して恥ぢます。』

『よし分つた。』

『許して下さいますか。』

『敢て留めはしない、が、家にゐる譯には行くまい、鵜澤へ對してわしが心苦しいから……』

『はい。』

と、さすがに氣の毒になつて、父の顏を見るに堪えなかつた。

『内々はとにかく、表面は廢嫡せねばなるまい……わしも成らうことなら、お前がそれ程に信じてるお妻ぢや、家へ入れたいのは山々ぢやが……鵜澤の手前それも成り兼る、わしの立場も苦しい。』

『濟みません。』

『せめて、鵜澤の話が持ち上らんうちに、お妻に逢つたならばと思ふが、それも返らぬ愚痴ぢや。』

怒つて喧嘩して別れるより、恁うして柔しく出られると、かねて覺悟してゐたことは言ひながら、流石に肉身の情、何となく物悲しさを感じて、綱館も冷たい涙を禁めあえなかつた。

『御父様。』

と、何か言ひかけやうとするのを、子爵は遮ぎつて、

『何にもいふな、わしが惡かつたのぢや、此の老年になつて、わしが苦しい思をするのは、みんなお前の母を欺き、お前を欺き、お妻を欺むいた罪ぢや。』

『御父様、〳〵〳〵。』

と、綱館は悲しげに叫んだ。

『父甲斐もない父ぢや、はゝゝゝ。』

と、寂しげに笑つて、

『健在で暮せ、わしはもう逢ふまい。』

『は、御父様も。』

『お妻にもよう云うてくれ、父とも呼ばれず、嫁ともいへぬ、辛いのは世の義理ぢやが、これもわしが自から招いたのぢや。』

綱館は老いたる父の心を思ひやると、さすがに我意ばかりも通せないやうな氣持がして、俄かには立ちもかねて、暗涙のすべなさを覺えた。

『生さぬ仲でも母ぢや、一目逢うて行つてくれ、今では、お刑一人を頼みに憎からず思ひくらしてゐるやうぢやが……ああ、これも憂き世ぢや。』

と、顏をそむけて鼻を拭んだ。

時に、襖の外から轉げるやうにして飛んで來た子爵夫人、白髮の丸髷をゆすつて

わが子の袖にすがつた。

「網館、行かずともよい、行かずとも。」

「母様」

「様子はきゝました、さりとは氣強い、この年老つた父や母を捨てて……ええもう、悲しくつて切なくつて涙がこぼれます、鵜澤さんの方は結納を取りかはしたといふではなし、斷るに何の義理立、構ひません、お妻をつれてお來でなさい、お妻を、わたしがゆるします、わたしがゆるします。」

「待て。」

と、子爵は妻と子の間をわけて、

「さうは成らぬ義理があるのぢや。」

「だつてあなた。」

と、夫人は老の目に涙を湛へて悲しげに言つた、網館は默として下をむいてゐた。

三 飛行機

その年も暮れて、一夜あくればお正月、人の心も何となく長閑に浮き立つて來る松の内、往き交ふ人の足どりにも、羽子つきかはす女小供の袖袂にも、明るい、華やかな春の光が動いてゐた。

花枝の病はまだよくはなかつた、さりとてめつきり惡いといふでも無かつた、厚い蒲團を重ねた儘打ち臥して、人の世の樂しい春を他に藥に親しんでゐた、何所か他所で百人一首を讀む聲が夢のやうに響いて來る、そして折々面白げな笑ひ聲がどつと聞えて來る、花枝は寂しさうに耳を傾けて居た。

家が忙がしいといつて、あければもう去年の暮に妹のお八重は姉の看病をこゝた。

わつて出て行つた、何となく氣が晴れやかになつて、花枝はのびやかに病を養つてゐる、主人の珠太郎は、忘年會だの、新年會だのといつて、夜も歸らない事があつたが、それでも花枝は氣に留めなかつた、獨り子の好男の生ひ立つのを樂しみに、良人のことなどは忘れたやうに日を過した。

『此の調子で行けば、わたしも花の咲く時分には丈夫になれる。』

と、花枝は自から信ずる程、それ程氣分がよかつた。

『母さん、僕、飛行機を買つて貰つたの。』

と、好男が威勢よく歸つて來た、今朝、女中と一所に里へ年始にやつたのが、晝飯ゝ御馳走になつたと見えて、午後になつて歸つて來たのだ。

里の父母は、程遠からぬ淺草の駒形に小間物の店を出してゐる、妹のお八重もそこにゐるのだ。

『さうかね、よかつたわね、祖父さんに買つて戴いたのかい。』

と、花枝は笑顏を擡げた。

好男は飛行機の玩具を持つて入つて來た、餘り立派なものでは無かつた、買つて貰つたといふから定めし立派のだと思つたのが、案外粗末なので花枝はちよつと意外に感じた。

『叔母さんと仲店へ行つてね、そして買つて貰つたの、僕もつといいのがあつたけれども、これが欲しかつたから。』

と、好男は言つた、どんな粗末なものでも、人から貰つたものは嬉しく感じると見えて、好男は餘程嬉しげに言つた。

『叔母さん、八重ちやんかい。』

と、花枝はちよつと眉を潛めて厭さうな顏をした。

『あゝ、叔母さんさ、淺草へ行つて、活動見るつて言つたのだけども、僕、母さんが病氣だから廢めて早く歸つて來た。』

『ああ、好男。』

と、花枝は手をあげた。

『何有、母さん。』

と、好男は飛行機をそこへをいて枕許へ寄つた、その手をしつかりと握つて、

『お前、母さんの病氣がそんなに心配になるのかい。』

『だつて、母さんだもの。』

『柔しいことを言つてくれるね。』

と、花枝はほろ〳〵と泣いて、

『なほらずにゐるもんか、きつと全快る、きつと全快る、お前の心ばかりだつて癒らずにゐない。』

と、言葉を重ねて、またしてもほろ〳〵涙に咽せた。

『母さんはね、もう病氣はいいんだよ、だからお前、お正月ではあるし、折角叔母

さんに買つて戴いたのだから、外へ行つて飛行機を飛ばしてらつしやい。』

『外へ行かなくもいいの、家の内だつて飛ぶんだよ、飛ばして見せやうか、ねえ母さん。』

『さうね、ぢや今日は暖かいからお庭で飛ばせて御らんな、そして、そこの障子をあけて母さんに見せてお呉れ。』

『ああ、左樣しやう。』

『好男は立ち上つて障子をあけた、春のやうな暖かい日であつた、日の光が麗かにさして陽炎でも立ちそうな午後であつた、可成り擴い内庭へ出て、好男は玩具の飛行機の飛ばし方を說明して聞かせながら、やがて空中へ飛ばした。

『ああ、本當に、宛で本物のやうだね。』

と、花枝は身體を乘り出すやうにして見た居た。

『高く飛ぶだらふ、このゴムさへ取りかへればね、何時まででも使へるんだよ。』

と、好男は得々として、頻りと飛ばして見せた。

何所からとも、羽子板の音がする、歌留多を讀む聲がする、三味の音もする、艶めいた唄も聞える、何となく春らしい陽氣である、子は玩具の飛行機を飛ばし、母はそれを眺めて、内にも外にも春の景色が動いて居た。

すると、如何して拍子でか、飛行機が庭の松の木の枝にかかつた。

三三　冷き死骸

國旗を掲げる竹竿を持つて來たけれども、枝が高くつて届かなかつた、二階の物干台から取らうとしたが、其所からも竿は届かなかつた、花枝は、然しかへつてそれを喜んだ。

『いいから放つてをきなさい、母さんがもつと大きいのを買つてあげますから。』

と、殘り惜しげに見てゐる好男に言つた、お八重の買つてくれたといふその品を手許に置くのが厭だつたから、木の枝に引つ掛つて仕舞つたのを喜んだのである。

『ああ、いいことがある。』

と、好男は勝手元へ飛んで行くと、やがて細い紐をもつて飛んで來た。

『何をするのです。』

『木へ上つて取るの、譯はないんだよ。』

と、好男は事もなげに言つた。

『およしなさい、木になんて上つて怪俄でもしたら如何します。』

『なに、大丈夫だよ、怪俄なんかしやしないよ、僕、上手なんだよ。』

『危險からお止しなさい。』

『いいよ、母さん見てゐて御覽。』

と、好男は持つて來た紐で輪をこしらへて、それを兩足の尖へかけて、松の木へ

手をかけると、やがて輕々と上つて行つた。

「まあ、お前。」

と、花枝は驚きながらも、何時の間にこんなことを覺えたのかしらと、内心うれしくも感じたのである。

「母さん〳〵。」

と、好男は木の枝で叫んだ、花枝はそれを見てゐるに堪えなかつた。

「危いから、それをとつたら早く下りておいでなさい。」

「ええ、今すぐ降ります。」

と、言つて好男は、上手に飛行機をとつて、そして靜かに降り初めた、する〳〵と二足三足降り初めた時に、如何したはづみでか足を踏み損なつて、好男の身體は……

「あれ、好男。」

と、花枝は金切聲をあげて、病氣の身をも忘れて飛び起きた。

好男は悲鳴をあげて地に落ちたのだ。

「誰か來て、好男が……好男が大變……」

と、花枝は轉がるやうに椽側へ這ひ出して、跣足の儘庭へ出た。

「好男……好男……あゝ坊や……」

花枝は、地に落ちて、物も言はずに倒れてゐるわが子のそばへ駈け寄つて、その首にとり縋つて泣いた。

「坊や……坊や……」

花枝の絹を裂くやうな泣聲が、靜まりかへつた家中へ響いた。

木から落ちた好男は、頭を打つた爲に裂しい腦震盪を起して死んで終つたのである、醫者がかけつけてももうこれを蘇生らせる力は無かつた、電話に驚いて、珠太郎が店から歸つて來た時は、もうわが子の身體は冷たくなつて横たはつて居た。

花枝は狂人のやうになつて泣き叫んでゐた、わが子の死體にとりすがつた儘、面もあげないで泣いて居た。

『お八重が惡いのだ、お八重が……飛行機なんぞ買つてくれるから惡い。』

と、あらぬ所で妹を恨みもした。

『年始にやらなければよかつた、飛行機など買つてくれなければよかつたのに、お八重が惡いんだ。』

『何を言ふのだ。』

と、珠太郎は叱つた。

『いえ、妹が惡いんですよ、お八重が飛行機なぞ買つて呉れなければこんなことに成らなくつて濟んだんですもの。』

『こんな事になると思つて買つてくれた譯ぢやあるまいし、そんな無茶なことを言ふ奴があるか。』

『左樣ですよ。左樣ですよ、好男を殺さうと思つて飛行機を買つて持たせたんです、左樣だ、左樣に違ひない。』

『おい、何を無茶なことを言ふのだ。』

『無茶ぢやない、さうだ、お八重が好男を殺したんですよ。』

『馬鹿ッ。』

と、其の袖を捉へたのをふり放して、

『何が馬鹿です……あなたはお八重を可愛がつてるから分らない、此の子がゐちや何かの邪魔になるから、それで殺したんわ、それで、それで殺したんわ。』

と、花枝はヒステリックに號泣して、冷たい死骸に顏をふせて身悶えした。

三四　永き恨み

險惡な色が花枝の目の內に動いてゐた、妹を罵しり、良人を罵り、天地を恨み、神佛を恨み泣きに、前後もなく正體もなく號泣した。

その好男の死體の横はつてゐる枕許に、細い紐と飛行機があつた、花枝は飛行機をめちや〳〵に破壞して終つた、そして、好男が木登りするのに使つた細紐を手にとつて見ると、ギョッとして目の色を變へた、身の毛も慄然とする程の恐ろしさを感じた。

「おふく、おふくッ。」

と、女中を呼んだ。

『こ、この紐は如何したのです。』

と、紐をそこへ投げ出して、花枝は女中を睨みつけて云つた、おふくは畏まつて、

『どうしたので御座いますか。

『知らないのかい、此の紐は何うしたの、お前が坊やに遣つたのかい』

『坊ちやんが、御自分で御持ちになりましたのですよ、私の襷で……』

と、おふくは恐ろしさうに身をふるはして、

『どうぞ御勘辨を……わたしが御貸し申しさへしなければよかつたのです……わたしが……』

と、聲も切れ〳〵に打ち伏して詫びた。

『さうぢやないよ。』

と、花枝はヒステリックに身を悶えてるやうに肩をゆすつて、

『この紐を如何して拵へたといふんだよ、お前が貸したのを惡いつていふんぢや無いよ、この紐は何の布片で拵へたかつて、それを聞いてるんだよ。』

『あゝ、それですか。』

と、おふくは、さすがにぎくしした。

飛行機を買つてくれたお八重が、好男を殺したとまで言つてる場合、もし、紐を貸したのは共謀だとでも言はれるかと、内心ビク〳〵してゐたが、左樣で無かつたので、先づは安心の胸を撫で下した。

『どうしたのだよ。』

と、花枝はイラ〳〵した聲で急き込んで言ふのである。

『それは、その……』

と、その布の出所を問はれると、おふくはちよつと返事に困つた、何故なら、これは花枝の簞笥の底から、そつと失敬してをいたのである、もつとも、その時はお

八重もゐて、お八重が呉れるといつたものではあるけれども、

『どうしたのだよ。』

『は、はい、』

『わたしの簞笥の中に、これと同じのがあつたんだけれども……それとは異ふんだらうけれども……』

『はい、それはその何で御座いますよ、いつかお八重さんの被在しやいました時、奥樣の御手廻りのものを虫干しました。』

と、言ひかけて、そつと花枝の顏色を窺づて、

『着物の片袖のやうなものが御座いましたので、お八重さんが、こんなものは不要だらうからお前が取てをきッて……左樣仰有るもんですから、つい、その……』

『左樣だ、やつぱり……』

と、花枝はがつかりしたやうに、ぐたりと頭を落した。

『戴きましたのを、わたしが襟にしたり何かしてをきましたので……』

と、言ひ切つておふくは額の汗をぬぐつた。

恐る〳〵おふくが顔をあげた時、花枝は死んだやうになつて突伏してゐた。

『奥様、どうか爲いましたか。』

と、呼んだが返事はなかつた。

『奥様。』

と、重ねて呼ぶと、ひよいと顔をあげた、目が險悪に光つて、髪の亂れがその蒼ざめて骨の高い頬にふりかゝる物恐ろしさ、おふくは思はず知らず飛び退つて、

『あれえッ。』

と、悲鳴をあげた。

『餘りだ、餘りだ、私が悪いんだから、私に祟つて呉ればいゝのに、何にも知らな

い坊やを殺すなんて、餘りだ、餘りだ。』

と、あらぬ方を見つめて、血走つた眼の恐ろしい形相で、手足を戰かしながら、

『旦那さま、大變で御座いますよ。』

と、おふくは泣き聲を絞つた、珠太郎は周章て飛ん來た。

『花枝、どうしたのだ。』

『私の悪いところはいつくらでも詫ります、私を攻めて下さい、私を……何にも知らない可愛い坊やを取り殺さなくつてもいゝ……』

と、口走る花枝の形相の物凄さに、珠太郎も流石にギヨッとして、その膝のあたりを見ると、覺えのある細紐の縞柄……

『あッ、これは……』

と、胸にギクリ、この紐こそ、夫婦がまだ小山の片田舎にゐた時、あの老人の授

身をとめやうとして、捉へた手にのこつた片袖であつた。

三五 片袖の怨念

細紐とは言ふものゝ、片袖を二つに裂いて襷にこしらへたのだから、誰が目にもその田舎縞がはつきりと分つた、手織木綿の茶縞の、あまり見かけないものであつた。

『あゝ、坊や〳〵、わたし達が悪いばつかりに可愛い坊やを殺しました。』

と、さめ〴〵と泣くかと思へば、やにはに猛り立つて、

『お八重が悪い、お八重が……お八重が飛行機さへ買つてくれなければこんなことにはならないんだ、人の亭主を寝とつた上に、可愛いゝ坊やまで殺して……何するか覚えておゐで。』

とも叫んだ、さうかと思うと亦、

『私が悪いんです、わたしが盗つたんです、勘辨して下さい、詫ります、それなのに坊やを殺して……罪も咎もない坊やを殺すなんて酷い、酷い……』

などと號泣してゐた。

泣き叫び、狂ひ歩くのを漸やく取り沈めて、寝かしつけて、珠太郎は太い息をついて、花枝の枕許に腕こまねいて座つた、狂ひつかれて、花枝はすや〳〵と眠つてゐた。

『御免なさい。』

と、背後から聲をかけてお八重が入つて來た。

『あゝ、お八重……』

と、珠太郎は力なく振りかへつた。

『好ちやんが大變なんですつてね、先刻家へ來てくれた時には元氣で話をしてゐた

のがね、飛んだ事になりましたわね。」

『仕方がないよ、壽命がないんだ。』

『姉さんは如何？』

と坐つた。

『此女も仕方がない……おれはもう泌み〳〵家にゐるのが厭になつた。』

『不實だわね。』

と、莞爾笑つた。

『それも誰かのおかげさ、八重ちやんといふ美くしい惡魔が、おれを誘惑してゐるんだから。』

『惡魔ですつて。』

と、お八重はまた嬌笑して、

『そりや左樣と、ねえ、此の間の話の藝者家ね、いい按配に賣りものがあつたの、それもね、流行なくつて止めるんぢや無いんで、立派な旦那が出來て、こんな商賣してゐなくもいいことになつたのですつて。』

『さうか、ぢやその家を買はうぢやないか、直段なんか向ふの言ひ値で構やアしないよ。』

『今日先方へ行く譯になつてるんですけれども、あなた一所には被在やれないでせう。』

『さうさ、此の場合だからな、お前に任せるから、いいやうにして置くさ。』

『左樣しませう。』

暮に家へ歸つたのは、お八重の希望が藝者家をやつて見たいと云ふので、新しく初めるよりは、どこか賣物でも出たらばと內々探してゐたのであつた。

『一體、何所だい、その家は。』

『芳町の月の家つてね、ほら、此の間中新聞で評判になつた柳原といふ華族の皆樂